
ちっさいおっさんみいーつけたぁっ！

小野宮 夢遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちっさいおっさんみいーつけたあっ！

【Nコード】

N7139T

【作者名】

小野宮 夢遊

【あらすじ】

俺の人生は毎日が平凡だった。平凡だったが、退屈だと思った事はない。このまま、平凡に俺の人生は過ぎていくんだと思っていた。それで良いと思ってた。それが良いと思ってた。しかし、その願いはあるとき簡単に崩れ去っていくこととなる。ある、一人の人物によつて。——いや、それは正しくはない。何故なら、その人物は——それは人間では無いからだ。——その生物の正体は……。——ねえ、貴方は知っていますか？

——この奇妙な都市伝説を——。男子高校生の周

りで繰り広げられる、少し奇妙なファンタジーコメディ。

ブローグ 俺の平凡な日常は何処に

毎日は平凡だ。

平凡で、特に何か俺の人生を変えてしまつような大きな出来事が起こるわけでもない。

空から女の子が降ってくるわけでもなく、宇宙人が攻めてくるわけでもなく、ましてや未来から何かが来るわけ何かない。

只坦々と、適当な困難を与えられながら、あっさり毎日が過ぎていく。

確かに、毎日は平凡だ。

しかし俺は、それが退屈だなんて事は思ったことはない。

このまま死ぬまで平凡に、平和に毎日は過ぎていくんだと思つた。

それで良いと思つてた。

それが良いと思つてた。

人生は、そんなものだ。

．．．．．なのに．．．．．なのに．．．．．なのに．．．
．．．．．っ！！

俺の平凡で平和な毎日は、ある出来事によつて簡単に壊される事となる。

平凡な日常が壊れるのはさして難しい事でもなく、案外簡単に壊れてしまうものだった。

・・・・何でなんだよ・・・何で俺なんだよ・・・
・何でだよ・・・っ!!

ものが壊れた後に込み上げてくる怒りの念。
俺はそれを恨まずには居られなかった。

・・・・畜生っ・・・何でここに来たんだよ・・・
・クソ・・・っ!!

それは――俺の平凡を奪っていったのだから。

・・・・何なんだよ・・・お前は何者なんだよ・・・
・何でいるんだよ・・・
・・・・何なんだよっ、・・・お前はっ、何な
んだよっ!!

――俺か？

――俺はなあ――・・・。

俺の人生を変えてしまったその正体は――。

ねえ、知っていますか？

貴方は、この奇妙な都市伝説を
.....。

第一話 非日常は突然に

日常こそが非日常だ。

そう、誰かが言った。

しかし俺は、非日常が滅多に來ないのが日常だと思ってる。

それは、田舎から東京に引っ越してきても変わることは無かった。

今は梅雨。

日本独特の、雨が続きじめじめとした嫌な季節。

例に漏れることも無く、今日もまた空には曇天が広がり、止むことを知らぬように雨が降り続いていた。

そんな様子を眺める俺は、かなり困り果てていた。

何を隠そう、今朝学校に來る途中に傘をぶっ壊したからだ。

当然傘は使える状態じゃない。しかし、外は雨だ。俺の家は雨の中走って帰るほど近くはない。

こんな事なら予備の傘を学校に置いとくんだったと後悔するが、今更遅い。

それに予備の傘を学校に置きっぱなしに何てしておいたら、誰かにばくられていた事だろう。そう自分に言い聞かせて過去の自分を恨むのは止めることにした。

しかしそんなことをやっていても、当然傘が手に入る事はない。

誰か親切な人が傘を譲ってくれたり、未來から來たロボットの物がテッテレレッテッテレレッテッテーターっとポケットから傘を出してくれないものか。

そんな馬鹿な事を考えながら、一人放課後の教室で窓の外を見ながらこの状況からの脱却方を思案していた。

「どーおしたのっ？ 山田くんっ？」

そんな時、俺は後ろから声がしたのを聞いた。

その声に振り返ると、後ろには俺の見知った顔があった。

「なんだ東^{あずま}かつ。どーしてここにいんだ？ 今日^{けふ}は部活^{ぶくわく}じゃなかったっけ？ それと俺、山田じゃなくて山本^{やまもと}なんだけど」

「山田でも山本でもいいよっ、山は合ってるからっ。今日は部活はお休みなのだよっ！ さっきまで図書室に本返しに行ってただけなのさあっ！」

「キャラ作ろうとしなくていいよっ。いつもそんなしゃべり方しないだろうお前」

「ええーっ！？ こんなしゃべり方じゃなかったのかっ？ わっちっ。どんなしゃべり方すればいいのですっ？ 何だかわくわくすっぞっ！」

「普通で良いよっ、普通で」

「はあーいつ！」

突然の初登場でキャラ作りに失敗した此奴——東^{あずま}美衣^{みい}は俺のクラスメイトだ。

クラス一小学生のように明るく元気だが、クラス一からむと疲れる五月蠅い奴だ。

同時に、クラス——いや、学校一を争う位に可愛い奴でもある。

「そうか、今日は部活無いのかつ。で、何の本を返しに行ってたんだ？」

「んーっ？ えつとねっ、『大魔王地獄への誘い ふははははー貴様を蠟人形にしてやろうかぁーっ！ 2』ってやつだったかなあ？」

「……………なんだその本？ 面白いのか？」

「うーんっ、途中までは良かったけど、ラストがパツとしなかったなぁーっ。結局お前がクロウ・クルワツ八だったのかぁーっ！ みたいな？」

「……………ふーんっ、なんだそれ？ 意味が良く分からないんだけど」

「私もよくわかんないっ！ でも今度映画化だよ？」

「マジでっ！？ すげーなそれっ！」

そんな会話を繰り返しながら、俺はちらつと窓の方に目をやる。外は相変わらず雨が止みそうにはない。

そんな俺の様子を見た東は、不思議そうに俺を眺め、そして尋ねた。

「どうかしたの？ そういえばっ、なんで山崎君はここにいるの？ 部活とかやってなかったよね？」

「いやっ、だから山本なだけどっ」

そう言つて不思議そうな表情を浮かべる少女は、俺のそばに近づいてきて何か不思議な物を見るような目で俺の顔をあと十センチもない距離から見始めた。

「．．．．．近いっ！ 近いぞこの距離はっ！ 東とはいえ、美少女の顔がこんな近くにっ！ まるで付き合つてゐる男女がキスする寸前の距離みたいナ．．．．．っ！」

「．．．．．いやっ、俺彼女とかいたことは無いんだけどさっ！ いやっ、だから余計にまずいっ！」

「いやあっ、そっ、そのっ、かつ、かさっ、壊れちゃつて．．．．．っ！」

俺は東の突然の行動に身を出来るだけ反らしながら、真っ赤であろつ顔で焦りながらろれつの廻らない言葉を発する。

すると東は納得したような表情になり、俺からその顔を離してぱーとぐーの手をぼんつと叩いた。

「おーっ！ なるほどっ！ だから帰れないとっ！ そーかそーかつ。君は今朝傘でメリーポピンズをやるうとして壊したとっ！」

「してねえよっ！ 小学生じゃあるめーしっ。突風に吹かれて壊しただけだよっ！」

「またまたあーっ！ チャンバラごっこでもして壊したんじゃないのぉーっ？ 母ちゃんの目は見破れないわよっ！」

「だから小学生じゃねえんだよっ！ 誰が母ちゃんだっ！」

俺がそう突つ込むと、東はなにやら鞆をあさり始める。

それを今度は俺が不思議そうに見ていると、少女が鞆の中から何

かをとりだした。

「テッテレレッツテッテレレッツテッテ！ 折りたたみ傘あーっ！ しかも二本ーっ！」

「おおっ！ 傘じゃねえかつ！ なんで二本も持ってたんだ？」

「一本は自分のロッカーにあつた予備用っ、もう一本は今日持ってきた予備用っ、そしてもう一本は今日差してきた普通の折りたためない傘ですーっ！」

「三本もあんのっ！？ てかなんで今日も予備用持って来たんだよっ？」

「んーっ、それには事情があつてですねーっ、私の妹が遠足かなんかで私が学校に持つてつてる傘を持つて行きたいとかなんとかでーっ、予備用を違う傘に取り替えようと思って持つてきたらですねーっ、間違えてどっちも持つて帰ろうとしましてーっ、それで気が付いて一本置きに来た訳ですーっ！」

「んーっ、つまりはそそっかしかったわけですね？」

「ピンポーンっ！ せいかーいっ！」

少女は元気にそう言うと、俺に一本の折りたたみ傘を手渡す。

「だから迷える貴方にこの傘を貸して差し上げましょうっ！」

「えっ！ それは本当ですかっ！」

「それって嘘って言っても良いの？」

「それだけはお勘弁をっ！」

「うそうそっ！ 貸してあげるよーっ！ その代わり、ちゃん
と返してよねっ？」

「おおーっ！ ありがとうなっ！ 絶対に返すよっ！」

「破ったらチュッパチャップス三本ねっ！」

「……………安いのなっ」

そんなこんなで東からこの葛柄の可愛い傘を拝借した俺は、
雨の中を自宅に向かって歩いていった。

大分この街にも慣れた。去年初めて来たときは、右も左も分から
なくてホームシックになりそうになったもんだ。

俺はこの町には今の高校に通うためにやってきた。

俺の実家はドが付くくらいの田舎にあつて、近くに大した高校が
無かったため、この高校に来たくて一人で越してきた。

夢の一人暮らし生活は、その過酷さに夢を砕かれたのだが、まあ
それでも俺は今の生活には満足している。

学校もそこそこ楽しいし。

……………それにしても、やっぱりなんだかんだで東は可愛い
よな。

……………顔が近づいたのにはさすがに心臓が死にそうだった。
……………東が彼女つてのもいいなっ。でも彼氏さんいそうだ

けどな。

・・・・・・青春してえーっ。

そんな事を考えながら歩いていると、学校を出て二十数分経った頃に自宅に着いた。

外見は決して新しくは見えないボロアパートといった感じた。

俺はそのマンションの一階の部屋の前に立つと、傘を閉じて水滴を軽く振るい、鍵でドアを開けて中へと入っていった。

それまでの俺の人生は、平凡で平和だった。

特に何の変哲もない人生だったが、それでも俺は幸せだった。このまま、今までのように時が流れていくんだと思っていた。死ぬまで、平凡で平和な毎日が続いていくと信じてた。

しかし、次の瞬間に俺が薄暗い部屋の電気を付けたときに、それは音もなく崩れ落ちる。

『パチッ』

「「おあっつー!!」」

そんな俺のものではない奇妙な叫び声が俺の部屋に響いたときに、俺の今までの平凡な人生は終わりを告げた。

「・・・・・・なっ、なんだっ!? これは・・・・・・
っ」

「「しっ、しまったあああっつー!!」」

貴方は知っていますか？

この奇妙な都市伝説を。

俺が部屋の電気を付けた瞬間、そこで低い悲鳴を上げていたのは

、

小さな小さな、おっさんだった。

第二話 おっさんの襲来

雨が止むことを知らずに降り続ける梅雨のある日。

薄暗かった部屋の明かりを付けると、そこにはこの世の物とは思えないものがいた。

大きさはよく絵本で見かける小人や妖精やくらいのそれ。――

――しかしそれは、およそそんな可愛らしい言葉で表せるような生物ではなかった。

「・・・・・・・・えっ、なっ、なにこれ・・・・・・・・つ。」

突然の奇々怪々な出来事に体を膠着させる俺の前には、これまた驚き体を膠着させる人間が一人。――いや、それは人間ではない。人間のような容姿を持った、小さな小人だった。――しかしそれは小人でもない。単純にシルエツトだけでそれを表現するには適切かも知れないが、それは小人などと可愛らしい言葉では表しづらいものだった。

それは、性別と年齢が明かな小さな生物。

――それは、小さな小さなおっさんだった。

明らかにおっさんだ。

どっからどう見ても、誰が見てもそれは限りなくおっさんだった。無造作な髪型に深緑色のジャージ、灰色の靴下に色の濃い顔には幾つかの皺。・・・・・・・・誰がどう見てもやつぱりおっさんだ。

しかしそのおっさんには奇妙な点が一つ――あまりにも異様に体が小さかった。

俺の掌の中で余裕で眠れるのではと思うほどに、それは小さかつ

た。

それは、この前テレビでやっていた、都市伝説の生物にそっくりだった。

「「おわわわあああつつ！！」」

姿を見られたおっさんは、一目散に何処かへ逃げようとした。ところが……………。

……………おっそつつ！！　なにこれっ、このおっさんおっそつつ！！

……………あれっ？　この都市伝説のおっさんってもの凄く早く逃げるんじゃないくらいに遅かった。雀の方がよっぽど速い。

それは尋常じゃないくらいに遅かった。雀の方がよっぽど速い。あたふたと逃げ惑うそのおっさんを眺めていた俺は、ハッとしてそのおっさんをとらえようと考えた。

俺は直ぐさまそばにあったグラスを手に取り、捕まえにかかる。すると奮闘すること数分後——。簡単に捕まえてしまった。

「「ほほははひへふへほつつ！！！」」

グラスの中でおっさんが必死に何かを訴えるが、音が遮断されて全く何を言っているのか分からない。

そんなおっさんの姿を横目で見ながら、俺は途方に暮れていた。……………捕まえたはいいいけど、これっ、どうしたらいいんだよ。どうしようもないぞ、このおっさん。テレビ局にでも着き出すか？……………いやっ、その前に、なんで俺の部屋にこんなのがいんだよ……………。

そんな途方に暮れる俺をよそに、おっさんはグラスを叩きながら何かを必死に訴える。

しかしそれは、俺の耳に聞こえることはない。

．．．．．なんなんだよこのおっさん。てゆうか本当にこれ都市伝説の奴なのか？ 足めっさ遅かったから、ただのおっさんだったりして．．．．．いやっ、手のりサイズのおっさんはただのおっさんじゃねえよ。．．．．．じゃあなんだ？ 妖精？ 小人？ いやっ、こんな夢のない妖精なんて聞いたこともない。．．．．．

．じゃあこれは．．．．．なんなんだ？

おっさんが何かを叫んでいる。地味に五月蠅い。しかし、俺には何を言っているのか分からない。

．．．．．つうかなんでおっさん？ プロローグから見るに、何だか序盤は女の子が降ってくる話だったのにつ、終盤は、なにか人外的な何かすごいやつが来そうな気配だったのにつ、結局来たのおっさんっすかっ！ いやっ、確かに人外的ではあるけれども、足の遅い小さなおっさんっすかっ！ なんてっ！

「ほほほははへっっ！！ はひへふははひっっ！！」

おっさんがグラスを叩いて必死に叫んでくる。

俺はそのおっさんの行動にとうとうイライラが募って、

「うっせえなあっっ！！ しずかにしろよっっ！！」

おっさんにむかって叫んだら、吃驚したおっさんがグラスの中でぱたつと倒れた。

「えええっっ！！ まじでっ！？ おっさんよわっ！」

そんなおっさんの様子に吃驚した俺は、そのおっさんをグラスからそっと出して、菓子箱の中へと移動した。

数分後、おっさんが目を覚ました。

どうやら頭をぶつけたようで、頭をさすりながらゆっくりと起きあがる。

すると周りをきよろきよろと見回し、状況を思い出したおっさんは菓子箱の壁をよじ登ろうと試みた。しかし、どうやら運動神経が壊滅的なようで、一向に上れる気配はない。逃げ出す心配はなさそうだ。

それを確認した俺は、おっさんに話しかけ始めた。

「……………なあつ、おっさんは、誰？ 何者？」

そう問うと、おっさんは一瞬俺の声に体をびくつと震わせたが、その後困ったように目を泳がせながら、言葉を発した。

「……………おっさんは夢の国から来た小人さんだよっ！ 君に幸せを届けに来たんだっ！ キラッ！」

棒読み。そんなおっさんの様子に、俺は冷めた目で菓子の閉めていく。

「あわわわっつっ！！ うそうそうだからっつ！！ 悪かったっ！ ちゃんと答えるっ！」

そう言っただけで慌てるおっさんの様子に、俺は菓子の蓋を再び開けた。するとおっさんは胸を撫で下ろす。

「……………で、おっさんは誰？ 何者なんだよ？」

そして俺は再度尋ねる。
するとおっさんは困った様子を見せながらも、諦めたように話し

始めた。

「……………そうさ、お察しの通り、俺は夢の国から来た小人なんかじゃないっ」

「それは知ってるっ」

「……………俺はっ、まあ、分かりやすく言っちゃえば、都市伝説の小さいおっさんと同じ種族だっ。俺はメディアに報道されたことはまだないが、この前、健太郎と典明が報道されてたっ。恐いとは思っていたが、まさか俺が人間に捕まってしまうとは……………」

「……………健太と典明はどうでもいいよっ。……………うんっ、それも大体見当は付いてたっ。じゃあ、まあ都市伝説のちっさいおっさんが目の前に居るのだから、その存在は認めることにしようっ。しょうがない。……………さてっ、では本題を聞こうっ、君はこの部屋で何をしようとしていたのだね？」

そう尋ねると、おっさんの口が動かなくなった。

どうやらどうやら言いにくい事のように、眼球がバタフライをしている。

「……………一旦話題を変えようか。おっさんたちの種族は何処に住んでるの？」

すると今度は渋々口を開く。

「……………人間は立ち入ることの出来ない場所にある地下空間だっ。俺たちは地底人でもある。俺たちは都市伝説の二つ名を持

つ種族なのさつ。どうだつ、まいったか？」

「・・・・・・・・まいりはしないなつ。ふうーん位の知識として、俺の脳内に記憶しておこうつ。・・・・・・・・でつ、なんでおっさんは俺の部屋にいたの？」

するとおっさんの口は開くことを止める。

眼球がまたバタフライを始めた。

「・・・・・・・・じゃあ、また一旦話題を変えようかつ。都市伝説のちっさいおっさんって確か逃げ足が速かったよね？ 何のに何でおっさんは逃げるの遅いの？」

「それは運動音痴の黒人になんでボルトみたいに走れないの？ と聞くのと同じ事だ」

今度は少し怒りの色を加えながらきちんと質問に答えた。
それに続いて、俺はまた質問をする。

「・・・・・・・・なるほどねつ。・・・・・・・・でつ、おっさんは俺の部屋で何をしていたのかな？」

すると、またおっさんの口は動かなくなる。
眼球は大海原を豪快に泳ぎ始めた。

「・・・・・・・・話さないと、ここから出さねえーぞつ」

「それだけのご勘弁をつ！」

少し脅すと、おっさんは命乞いをするかのように必死に声をあげ

た。まるで俺がオヤジ狩りをしているかのようだ。不法侵入という
犯罪を犯しているのはおっさんの方なのだが。

暫くおっさんは考え込むと、観念したように話を始めた。

「・・・・・・・・・・してた・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・はっ？」

しかし異様に声が小さくて全く聞き取れない。

俺が聞き返すと、またおっさんは渋々話し始める。

「・・・・・・・・・・してました・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・はっ？　だから聞こえねえよっ！」

すると自棄になったようにおっさんは怒鳴って理由を話した。

「・・・・・・・・・・だからっ、泥棒してましたっ！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

おっさんの突然の告白に、俺は思わず首を傾げる。

「・・・・・・・・・・今なんて・・・・・・・・・・。」

「だからっ、私は貴方の部屋で泥棒をしていましたっ！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

意味の分からない俺は、また聞き返す。

すると、もう全てを投げ出したように、おっさんは訳を話し始めた。

「・・・・・・・・俺たちの種族は、この人間の住む地上に何をしに現れていたのかというと、理由は他でもなく、人間の持ち物を盗むためのさつ。地下では日光が無いため、食料なんかが大してとれないんだつ。・・・・・・・・物がたまに無くなることがあるだろう？絶対にしまった筈なのに。それはみんな俺たちの仕業名のさつ！俺もその為に、お前の部屋から何かを盗もうとしてたつ」

「・・・・・・・・ああ？盗んだあつ？」

それを聞いた俺の顔は段々口角が上がっていき、顔が怒りに歪んでいく。

「・・・・・・・・何を盗んだんだつ？ああつ？」

それを見たおっさんはびっくりして焦り、さっきの言葉に訂正を加える。

「いやいやいややつ！そつ、そう怒るなつ！勘違いするなつ！俺は確かに盗みに入ったが、まだ何も盗んでないつ！盗もうとしたらお前が帰ってきちまったから・・・・・・・・。」

「勘違いするなじゃねえよつ！未遂とはいえする気満々だったんじゃねえかつ！」

訂正するおっさんに俺は怒りのつつこみを入れる。
するとおっさんはびくつとして倒れそうになったが、なんとか持ちこたえて足を折って座り込んだ。

「すいませんでしたあーっ!!」

ちっさいおっさんが必死に土下座をして頭を下げる。orzの立
体版のようだ。

俺は煮えかえりそうな腹をすんで押さえ込み、何となく哀れそ
うなおっさんを許そうと、血管を浮かび上がらせた顔で少し睨み付
けながらおっさんに話しかける。

「……………でっ、何を盗もうと思ったんだ？」

するとおっさんは頭を下げたまま話し始める。

「ははっ、実は私にも家庭がある故、食料を盗もうと考えており
ましたっ！」

「えっ？ おっさん家族いんの？」

意外な動機に、俺は驚いて尋ねる。

「はいっ、ありますっ。私の父に母、それに家内と子どもが三人
おりますっ！ 実は、私どもが人間様のものを盗んでいますのは、
家族を養う為なのでありますっ！ その為、目撃情報は皆おっさん
ばかりなのですっ！」

頭を下げて話すおっさん。

その意外な裏話に、俺は同情のような感情に包まれ、おっさんを
許そうかと考え始めたのだが、

「……………しかしっ、この部屋にはろくなものが無かったの

で、舌打ちして諦めて帰ろうとしておりましたっ。何もとる気は端からありませんでしたから、ご安心をっ」

そう薄笑ったような調子で話したおっさんに、俺の血管はぶち切れ、俺は菓子箱の蓋を閉め、思いつ切り振ってやった。

第三話 おっさんは迷子

「・・・・・・・・あほろへろはひ・・・・・・・・」

菓子の箱を振った後、そつと蓋を開けてみると、そこには案の定、目を回して伸びているおっさんの姿があった。

そんな姿を見て少しやる過ぎたと後悔するが、そう思う途端に、怒りが込み上げてきて自業自得だと後悔を消し去る。

しかし、何というか自分が想像以上におっさんの存在をきちんと認め会話をこなしていることを意外に思った。

都市伝説ではさらさら信じようとしなかったが、いざ目の前にしてみると、案外あっさりと存在を認めている俺に今更ながら驚く。

目は口ほどにものを言う・・・・・・・・か。

確かに、見てしまったら信じざるおえないような状況に陥ってしまつものなんだなあとしみじみと感じながら、俺はおっさんが目覚めるのを待った。

「・・・・・・・・ふっ、振りすぎだろっ、しっ、死ぬかと思つたじゃねえーかぁーっ」

暫くしたときに、おっさんが苦しそうに虚ろな目で言った。

「あつ、わりいわりい・・・・・・・・っ、つて、元はといえばっ、おっさんが悪いんじゃないかっ！」

「・・・・・・・・えっ？ 俺は悪くねえよ？ ありのままの

真実を言っただけじゃねえかつ」

「それが悪いんだよっ！ もう一回振ってやろつかっ？」

「いやいやいやいやっ、それだけのご勘弁をっ！ すいませんでしたっ！」

おっさんがまた深々と頭を下げる。

「……………謝るんなら、最初っから言わなきゃいいじゃねえか。そう思いながら、俺は溜息を吐き、めんどくさそうに冷蔵庫を漁った。

そして、その中からある物を一つ取り出す。

「まあっ、おっさんも大変なんだろう？ こんなんしか無いけど、これ持ってけよっ」

俺は、それをおっさんに手渡す。

おっさんはそれを受け取ると、俺の行動に驚き、目を大きく見開く。

「……………お前っ……………これ……………」

「魚肉ソーセージだっ。カルシウム入りだぞっ。それでも持つてとっくと帰りなっ」

「お前……………」

おっさんは俺の意外な行動に涙目になりそうになってきた。そんな目を汚れた袖で擦りながら照れくさそうに感謝の言葉を述べる。

「…………お前もいいところじゃねえかつ。まったく、ありがとうよっ」

おっさんは笑顔で俺にそう述べると、立ち上がった。

「お前のこと悪く言ってすまなかったっ。本当にありがとうっ。お世話になったなっ」

「ああっ、迷惑な奴だったけど少しは楽しかったよっ。家族に宜しく言っといってくれっ」

「……………ああっ。本当にありがとうなっ」

おっさんはそういうと、魚肉ソーセージをしっかりと持って……、
食べた。

もっしやもっしやと効果音が部屋に響く。

「……………えっ、ちよっ、ちよっとっ、ちよっと待てっ！
なんでお前が食べてんだっ？」

するとおっさんが何の悪気もなさそうに言葉を発する。

「なんでっつ、腹減ったからに決まってんだろ？ 貰ったんだっ、食べて何が悪い？」

「……………はあ？ ちよっ、ちよっと待てっ！ お前これ持って帰るんじゃ……………」

俺が意外なおっさんの行動に驚き呆れていると、おっさんは不思議そうな顔をして口を開いた。

「はあ？ 何を言ってるんだお前は？ 俺は一言も帰るだなんて言つてねえじゃねえか」

「・・・・・・・・・・はあ？」

そんなおっさんの言動に、俺は思わず首を傾げる。
するとおっさんは不思議そうに言葉を続ける。

「はっ？ いやっ、だからっ、俺は一言も帰るだなんて言つてないぞ？」

「・・・・・・・・・・はあ？」

俺はまた首を傾げた。

「・・・・・・・・・・いやっ、だつて帰りそうな雰囲気だったじゃねえか・・・・・・・・・・」

俺がそう言つておっさんに話しかける。
すると、おっさんは笑つて訳を話し始めた。

「だから帰らねえよっ！ いやっ、でも本当は帰るつもりだったんだけどさっ、ほらっこれが壊れちまったから帰れねえんだっ」

そう言つと、おっさんは何か小さなiPATのようなものを取り出した。

「……………なんだそれ？」

そう俺が疑問符を頭に浮かべると、おっさんはそれについて説明を始めた。

「これはなつ、俺たちの住む地下空間への入り口の場所を示すリーダーだつ。地下空洞へ行くための穴は何日かごとに移動するんだつ、俺たちはこのリーダーで穴を確認して自分達の住处へと帰っていくのさつ」

そう言っておっさんが説明するのを聞いて、俺はふむふむと感心する。

しかしそんな様子の俺を見て、おっさんは怒鳴りながら言葉を吐いた。

「なのになつ！ お前が俺のこと振ったからつ、壊れちまったんだよつ！ どうしてくれんだつ？ ああん？」

「……………ええつ！ そうだったのかつ！？ それはすまなかつたつ。帰れないのは困るよな……………、そして帰ってくれないのは俺も困る」

俺は怒鳴るおっさんを見て、俺は少々申し訳なさそうに言葉を発する。

そして少し面倒臭そうに考えると、俺は諦めたように怒るおっさんにむかって言葉を発した。

「……………しょうがないつ。俺が悪いんじゃないその入り口を探すを手伝ってやるよつ、少しくらいならつ。……………でも、もとはと言えばおっさんが悪いんだからなつ」

そう言って、俺は溜息を吐いておっさんを横目でちらりと見る。
すると、おっさんは俺の言葉に驚いて俺を見上げる。そして・・・

「・・・・・・・・・・はあっ？ 当然だろう。お前が壊しだんだぞっ？
ソーセージ一本でとんになるわけねえだろう」

不思議そうな目で俺を軽蔑した。

「・・・・・・・・・・やっぱ手伝うのやめよーっと。おっさんをテレビ
局にでも着き出そーっ。金になるかなーっ。我慢してたゲームでも
買おっかなーっ」

「わあああっっ！！ うそうそうそっっ！ すみませんでしたっ
！ ご協力ありがとうございますっ！ ソーセージとても美味しゅ
うございましたっ！」

冷めた目をさあーっとおっさんから遠ざけていった俺を見て、お
っさんが慌てて言葉を訂正する。

そんなおっさんを見て、しょうがなく俺はおっさんに向き直る。

「・・・・・・・・・・でっ、俺は何をすればいいんだよっ？」

そう問うと、おっさんは改まったように一つ咳払いをして説明を
始めた。

「・・・・・・・・・・お前達に集まって貰ったのは他でもないっ」

「・・・・・・・・・・いや集まってねえよ。お前達って俺しかいねーよ」

「……………実を言うと、大体の場所だけはあらかじめの情報で知っている」

「おっ、それは思ったより楽になりそうだなっ。よかったよかった。早く眠れそうだ」

「……………なので明日、探索に出ようと思っっ」

「えっ！ 明日っ？ なんで？ 今日じゃないのかよっ」

「うむっ、だってもうおっさん疲れてだりいもんっ。早く寝てえもんっ。腰が痛えもんっ」

「なんだよっ、その理由っ。やっぱりおっさんだなっ」

あきれ顔でそう言った俺は、そう言った後にふと重要なことを思い出す。

そして驚いて俺はおっさんの提案に口を出した。

「ん？ ちょっと待ったっ？ 俺っ、明日学校なんだけど……………」

張り切って案を言うおっさんに向かって、俺は困ったように言葉を紡ぐ。

するとおっさんは俺に向かって笑いかけた。

「心配すんなっ！ お前が学校に行ってたって何の問題はないからなっ！」

「・・・・・・・・・・はあ？」

そしてそんな意味不明なおっさんの言動に首を傾げながら、俺はその言葉の意味の分からぬまま、朝を迎えるのだった。

・・・・・・・・・・あつ、スケダンとナルト見んの忘れた・・・・・・・・・・
・・。

第四話 おっさんは登校します

ジリリリリリリ——　　つつ．．．．．。

俺に朝を告げる、目覚まし時計の音が部屋に響く。

その音で目覚めた俺は、俺の睡眠を止めたその目覚まし時計を少し鬱陶しく思い不機嫌そうにその頭部を叩いて音を止めた。

思うと可哀想な待遇な奴だ。その人のために自分は生を尽くすというのに、その人には嫌われるだなんて。

しかし寝起きが悪いのは誰だつてあることだ。俺は悪くはない。

．．．．何故目覚ましについて朝から語った？ いや、何となく思ったから．．．．俺はポエマーか？ 馬鹿か？ 朝からそんな馬鹿なことを思いながら、俺はいつもどおりくしゃくしゃな頭のまま洗面台の前に立った。

もちろん学校に行くためにその寝起きの史上最悪な顔面を少しはマシな物にするためだ。

俺は、いつもどおり学校へ行く気でいた。

顔を洗って、ご飯を食べて、制服を着て、直前に焦って教材をかばんに詰め込んで．．．．そして、今日はまだ雨が降っていないようだから昨日東から借りた傘と自分の念のため買っておいた傘をかばんと共に持って家を出ていくつもりだった。

しかし、そうは簡単には事は運ばなかった。

何故なら昨日の出来事を鮮明に思い出したのと、その直前に、冷蔵庫を漁る小さなおっさんを見つけたからだ。

「…………おうつ、起きたかつ、早くしねえーと遅刻すんぞっ」

「…………なんで俺より自分家みてえに冷蔵庫漁ってんだよっ、なんで俺の親父みてえに振る舞ってんだよっ」

「いやっ、だって俺おっさんだもんっ、おっさんっぽくて何が悪い?」

「……………いまいち質問と答えがかみ合ってねえーぞ?」

日常から一気に非日常へと引きずり込まれた俺は、溜息を吐きながら冷蔵庫の中にあつたスーパーのパンを取り袋を破って食べ始めた。

するとおっさんはそれが食べたかつたらしく、羨望の眼で俺を見してきた。

しょうがなく俺は少しちぎっておっさんにやると、もほもほとパンを食べ始めた。

「……………あーあ、おっさんじゃなくて小さな妖精の女の子とかがよかったなあーっ、どうせ来るなら。悪魔と天使が来て『貴方は今日死にます』ってのも嫌だけどねっ。」

「……………でっ、今日おっさんはどうするの? 俺が高校へ行ってる間? 街に地底への入り口でも探しに行くの?」

パンを食しながらそう問う俺に、おっさんは不思議そうに首を振った。

「あっ? そんな訳ねえだろ? 俺はお前と一緒に高校へ行くんだよっ」

「・・・・・・・・・・はあ？ 何で？」

そんな訳の分からない事を言い出すおっさんに向かって、おっさんとお会ってから何度目か分からない疑問符を俺は口にした。

すると、おっさんは話し忘れてたと言わんばかりの表情でそのわけを説明する。

「ああっ、言ってなかったっけ？ 地底への入り口の大まかな場所、お前の通ってる高校だからっ」

「・・・・・・・・・・えっ？ ・・・・・・・・・・ええ——っ！！
俺の高校なのかよっ、その場所っ！ ってかなんで俺の高校知ってんだよっ！！」

そう驚く俺に向かって、おっさんはいたって冷静そうに俺の問いに答える。

「・・・・・・・・・・ああっ、お前の高校は、昨日部屋に落ちてた保護者宛の文書で知ったっ。入り口の場所は多様な場所に出現してな、たまに女子便所にも現れるくらいだっ、何処にでも現れて不思議はないっ」

それに、俺は少し冷静さを取り戻して言葉を紡いだ。

「ああっ、何だっけっ、修学旅行の何とかかんとかってやつかつ。なるほど。そしてお前らはおっさんだけでなくエロオヤジだったんだなっ」

「別にエロかぁないさっ！女子便所に出現する入り口が悪いっ」

そう言つて、少し顔を赤らめるおっさん。．．．．．やつぱりエロオヤジじゃん。でも、一瞬でもおっさんに憧れた俺は何なのだろうか。．．．．．健全な高校生だっ！

「．．．．．んじゃあつ、おっさんは俺と一緒に高校へ行き、おっさんは校内を隈無く探索し、俺も放課後に合流つ。それでいいのか？」

俺はおっさんにそう問うと、おっさんは首を縦に振りかけて．．．．．すんでで横に振った。

「．．．．．いやつ、それじゃ駄目だつ。俺つ、迷子になつちやうもんつ。お前とはぐれたら二度と会えなくなりそうだもんつ」

「．．．．．運動神経も無ければ方向感覚も無いのかつ」

「．．．．．悪かつたなつ、何も無くてつ。．．．．．あつ、スルメならあんぞつ、食うか？」

「食うかじゃねえよっ！ つーかそれ俺のっ！ 何となく食べたくなつてこの前買つてきたやつっ！」

おっさんが、俺が適当に作つてやつた菓子（箱の中の寝床（そこにあつたティッシュ数枚のちょー簡単簡易ベッド）からそろそろと出してきたスルメを、俺が勢いよく取ると、つつこみを入れる。しかしスルメを取るとあまりに可哀想な顔になつたので、仕方なく返してやつた。テッテテテッテッテ、おっさんは元氣を取り戻した。

「…………じゃあつ、俺が授業を受けてる間、おっさんは俺の鞆の中で待機つ、それでいいかつ？」

そう問うが、またもおっさんは首を横に振る。

「それは嫌だつ。だってお前の鞆の中臭そうだもんっ」

「……………つてつめつ……………はああつ、じゃあつ、机ん中つ、それで良いだろ？」

「やだつ、腐った給食のみかん出てきそうだもんっ」

「給食もう食ってねえよっ！ そんなの出てきたこともねえよっ！」

「うつそだあーっ、かあちゃんっ、なんでも知ってるのよーっ、白状しなさいっ」

「お前性別からして違うだろっ！ 誰が母ちゃんだっ！ だから変なもん入ってねえってっ！」

そしておっさんは机の中に駐留することに収まり、俺は慌てて支度をする、おっさんと共に家を出て行くのだった。

第五話 おっさんはうは

「・・・・・・・・でっ、何でそこに収まったのだね？君」

ある梅雨の季節の朝。その日は数日ぶりに雲の間からお日様が覗き、一日の始まりを明るく照らし出した。日本特有のじめつとした陽気は、相変わらずどこかすつきりとした気分を損なわさせるのだが、それは日本で暮らしている限りどうしようもない。今日はまだ涼しいので、そこはまあ、目を瞑る事にする。

それはさておき、俺は先ほどから気になることがあり、不思議そうな顔付きでおっさんのことを見ていた。

正確に言つと、見下ろしていた、だろうか。俺はおっさんのいる場所に些か疑問を思っていた。

何故ならおっさんの居るところ、それは・・・・・・・・。

「ん——っ、だつて考えたら普通こうなるだろ？お前の鞆の中臭そうで入るの嫌だし、お前手提げなんか持たないし、鞆に入つて潰れたら嫌だし、振られたら気持ち悪いしっ」

「だからつて、そこに入るかつ？普通っ。しかもおっさんがっ。聞いたことねえよっ、おっさんがポケットに入ってる男子高校生なんてっ」

・・・・・・・・そう、学生服の胸ポケットの中だった。

おっさんはそこから俺を見上げている。寂しくなりかけている頭が今にもポケットからちつらと見えそうだ。

「え——っ、でも漫画で女の子とか男の子の胸ポケットに入ってる俺ぐらいの生物見たことあんぞ——っ？」

「あれは漫画だしっ。それに胸ポケットの中に入ってるのは可愛い妖精とかペットだしっ。お前みたいなおっさんじゃ無いんだよ。おっさんとか、夢なさすぎるだろっ」

「のわぁ——っ！？おっさん夢有り余ってるぞ——っ！？競馬で一儲けしたいとか、パチンコで大当たりしたいとか……」

「……それは夢の種類が違う」

呆れた顔でそう言う俺を見て、おっさんは意味が分からなかったのか首を傾げる。

そしてそんなおっさんを見て俺も何か話しかけようと口を開けたのだが、隣を通り過ぎていった女子高生が、端から見れば一人で喋り続けている俺を見てくすつと笑っていった。それを見て何だか俺は恥ずかしくなり、一人で悩むおっさんに話しかけるのを止めて、黙々と歩き続けた。

暫く歩き続けると、やっと校門の前へと来た。

煉瓦造りのがっちりとした校門、そこを通ると不規則そうに見えて規則正しく並んでいる幾何学的な並びをした石畳が広がる。そして所々色の違うその石畳を歩いていくと、目の前に大きくそびえ立って、煉瓦造りのように見せた柱部分と、太陽の光を輝かしく跳ね返す真っ白い壁と大きな揃った長方形の銀色の窓が特徴的な、ま

だ新しい校舎が見えた。

そこが、俺の通っている高校、私立螢雪学園高校だ。

創立七十年近い伝統校であり、しかし偏差値はそれほど高くない、人気の高い高校である。競争率が高く、勉強には苦労したが、今はその甲斐あって今はこうしてここに通うことが出来ている。それに俺は誇らしく思っているし、俺の両親も喜んで鼻高く思ってくれている。……。まあ、最初は反対されたし、地元の方の公立高校よりも金もかかっているが。

「おおーっ！　すげーなこっつ！　俺初めて入ったぜっ！　でっ、ここは何処だ？　イギリスか？　城か？」

「なわけねえだろっ！　なんで東京から徒歩でイギリスに行けんだよっ、それにお前がここに来るって行っただろっ？　高校だよっ、俺の通ってる高校っ！」

異国をも感じさせる雰囲気その高校の様子を見てはしゃぐおっさんに、俺は思わず突っ込む。そして隣を通りかかった人に、突然一人で言葉を発した俺はびくつと驚かれた。それを見て、俺は口を紡ぐ。

と、おっさんが感激のあまり、俺のポケットから頭を出しそうになった。

それを発見した俺は、おっさんの頭がポケットから出ないように、無言のままぎゅうつと指で押さえ込む。

しかしおっさんは自分の存在が世間に認められていないものだと忘れたのか、身動きして俺のポケットから出てこようとする。

……。なかなか大人しく引っ込まない。いい加減に察しろよっ、と少し強く押し込んだが、それでもおっさんは我に返らず、ポケットから出てこようとする。と、

「あつ、おおっ！ 山本じゃねえかつ、おはようっ！ なにっ、今日はいつもより少し早いんじゃないか？」

後ろから俺のことを呼ぶ聞き慣れた声がした。

俺は少し慌てて後ろを振り返ると、そこにはやはり俺に向かって歩いてくる見知った顔があつた。

「……げっ、印南いんなみだっ！ まずいつ！ 俺のポケットからちっさいおっさんなんかが出てきちゃったら……！！

そう思い、俺は一人で慌てておろおろとし始める。と、咄嗟に思いつき、浮き足立つおっさんをポケットの中で驚掴みにすると、驚くおっさんを余所に、俺は急いでおっさんを鞆の中へと押し込んだ。

「ん？ どうかしたのか？ ……汗かいてるぞ？」

するとそのタイミングで、印南が俺の隣に肩を並べた。そして慌てたために冷や汗をかいた俺を見て、不思議そうにそう尋ねる。

「いつ、いやっ！ どうもしてないぞっ？ 今日は走って来たからじゃないかなっ？」

焦る俺は、適当に理由を作って印南に述べた。すると印南は納得したように頷く。

「ああっ、なるほどなっ。……でも、なんで走ってきたんだ？ 走らなくて間に合っただろう？」

「……しまったっ！ そう俺は思った。適当に理由を作った過去の俺を憎む。

「えっ？ あっ、いつ、いやっ！ ……最近運動してねえーなってるって、何となく走ってきたんだ……っ」

「ああっ、そうかつ。お前帰宅部だしなっ。」

再び納得したような表情を見せる印南を見て、俺はひとまず安心して息を吐く。

しかし、次の瞬間印南の言葉で、俺は身を震わせた。

「いやっ、なんか隠し事でもあるんかと思つてよっ。朝早く人の少ないときに来なくちゃいけない理由でもあるのかと思つてっ。なんちつてっ！ ……でも、んなわけないよなーっ、お前隠し事とかなさそうだもんなっ」

「んなあゝっ！？」

核心を突く問いかけに、俺は思わず奇声を上げて身を震わせる。

「ん？ ……どうかしたのか？ ……まさかほんとに隠し事……っ？」

俺の異変に気づいた印南が、俺の顔を覗き込む。

そんな印南にびくびくしながら、俺は目を泳がせ笑いながら、言葉を発した。

「え、ええ——っ？ まっ、まさかつ、そんなわけあるわけないだろ——っ！？ 俺が隠し事とかするわけねえじゃんっ！！」

暫し沈黙。

そして少ししてから印南が喋り出す。

「……だよね——っ！ お前が隠し事なんて出来るわけねえよなっ！ はははっ！」

「だろーっ？ 俺が隠し事なんか出来るわけねえじゃんっ！ ははは……」

可笑しそうに笑い出す印南。それに、俺は同意して笑い声を発す。
……此奴は全く、感がいいのか鈍感なのか、読めない奴だよなあ……。

……それに、此奴の中での俺のイメージってどんななんだ？ 隠し事出来る訳ねえってどういうイメージだ？ おいつ！

そんな事を考え、内心隠し事の件についてほっとしている俺は、隣にいて笑うそいつの事を考え始める。

名前は、印南いんなみ 京介きょうすけ。俺のクラスメイトであり、最近仲良くしている友人である。実家はここから二駅の場所らしく、毎日電車通って来ている。部活は……たしかサッカー部で、一年の時からレギュラー入りしている強者……。らしい。身長は俺より少し高く、そこまでではないが筋肉質の良い体つきをしている。そして、憎いが顔立ちの良い、心も黒くない、……所謂イケメンってやつである。

……ありっ？ なんか俺の周りの奴、みんな設定がつちりしてね？ 主人公の俺よりも設定凝ってね？ えっ、俺主人公だよな？ 主人公だよな？ ねえ？ あれっ、違うのっ？ 一人で舞ってるだけ？ 俺違うのっ？ ……いやっ、それはないよねーっ！ だって俺、主人公特権の鉤括弧無しで心の中を話せるというワザが使えるものーっ！ だよなーっ、俺主人公だよなっ！ ……ん？ なんだこれ？ これってなんだっ？ どうやって使うんだ？ わかんねえな……。

．．．．．えっ、印南っ．．．．．？　なんでここに．．．．．
．．．？　なんでこれ使えてんの？
．．．．．おおっ！　山本じゃんっ！　お前こんなとこで何し
てんの？　．．．．．ん？　なんか書いてある？　所謂いけめ．
．．．．．。

わわわわわ——っ！　読むなっ！　それ以上読むなっ！　なん
か恥ずかしいからっ！　てかなんでここにいの？　お前っ！

．．．．．えっ？　なんでって．．．．．。

．．．．．えっ、なんだなんだこれっ？　どうやって使うんだ
？　おっさんっ、機械音痴で良くわかんねえよ．．．．．？

．．．．．んっ？　誰だ？　山本っ？　じゃない．．．．．？
．．．．．あっ、俺か？　俺はな．．．．．っ。

．．．．．わわわわわわわあ——っ！！　ななな何でも無い
っ！　誰でも無いからっ！　しっ、知らないおっさんだからっ！

．．．．．？　知らないおっさん？　なんでおっさんがここに
．．．．．？

．．．．．あっ、それはだな．．．．．。

．．．．．わわわわわっ、わわわわわわわあああっっ！！　だか
らっ、何でもないからっ！　ほんつとに、何でもないからあ——
っ！！

．．．．．てかつ、俺にっ、主人公威厳をっ、

．．．．．凝った設定を下さ——　いつっっ！！

．．．．．なにこれ．．．．．？　これ、なんだ？

．．．．．さあっ？　おっさんわからないっ。

．．．．．だーからっ！！　俺主人公——　つつ！！

第六話 おっさんと同居生活

なんだかんだで教室に入り、印南は部室に用があつたらしく部室に向かつていったので、少し朝早めに来たためにまだ一人である教室内。

「……いやっ、正確には……っていつでも一人は人間では無いのだが、教室にはただ今二人の生物が居た。」

俺は恐る恐る鞆を開け、教材等を机の中へと移し替えていこうとする。と、案の定そこには開けた瞬間に鞆から飛び出して噎せ返る奴が居た。

「っだはあ——っ！っ！うゝえっ！がはっ、ごほごほっ！うあはあ——っ！っ！しっ、死ぬかと思つたあ——っ！こっ、殺す気かっ！」

「ああ——っ、悪い悪いっ！だつておっさんがポケットから出てこようとするんだもんっ、少しは都市伝説であること自覚持てよなっ！ったく、ばれたらどうすんだっ？」

「……あつ、そうだったなっ。悪い悪いっ。だつてなんか凄かつたんだもんっ。見てえじゃんっ」

おっさんは自分が都市伝説であることを改めて思い出すと、ぶつぶつと言ひ訳を言う。

そして少しすると、思い出したように俺に向かつてぶつと笑いを零す。

「ぷっ、くくくっつ！……お前、嘔吐くの下手なんだなっ！」

「お前に言われたかねえよっ！」

「えーっ？いやっ、俺よりお前嘔吐くの下手だろっ？ぜってえダウト下手だっつ」

「うっ！……まあ、確かに不得意ではあるが……」

「だっておっさんっ、ボロ負けしても全カードの三分の二制覇するぐらいですんだもんっ」

「俺の方がそれより遙かに嘔吐くの上手えよっ！」

「えっ！だって、この前やったときは信昭が六分の五枚……」

「信昭知らねえよっ！てかつ、信昭よわっ！」

そんな会話を続けながら、俺は着々と鞆の中身を机の中へと移し替えていき、本日の授業の準備をしていく。

そして話題は、本日の予定についてへと移っていった。

「……で、今日は放課後におっさんと一緒に校内で入り口を探し歩けばいいんだなっ？」

俺がそう尋ねると、おっさんはこくと頷く。

「ああ、それで大丈夫だつ。校内に詳しいお前と一緒になら、入り口もすぐに見つかるだろうつ」

「ん——つ、でも詳しいと言われると自信は無いのだが。でもまあ、駄目だったら明日探せばいいよなつ」

そう言つて俺が少し困つたような表情を浮かべ笑うと、おっさんは不思議そうな顔をした。そして、俺に言葉を発する。

「・・・・・・・・・・はあ？なに言つてんだつ？お前はつ？」

おっさんは不思議そうな顔をして首を傾げる。

「えつ？何が？」

おっさんの発言に俺は疑問符を投げかけると、おっさんは如何にも当然であるかのように言葉を発した。

「えつ？何つて・・・・・・・・・・。だつて、この学校内に入り口があんのは、今日までだもんつ」

「・・・・・・・・・・はあ？・・・・・・・・・・えつ、はあっ！？」

おっさんの突然の発言に俺は思わず驚いたような表情を浮かべる。すると、おっさんはまたもや言わなかったけ？というような不思議そうな顔で俺に向かって言葉を紡いだ。

「あれっ？言わなかったけ？今日までなんだよつ、ここに入り口があんのはつ。ちょうど夜中の十二時ぴったりに他の場所へ移動するんだつ。だから、今日見つけれなかったら、暫くお前の家に

住み着くこと決定だなっ」

「えっ、ええ——っ！！なっ、何それっ！今日見つかなかったら、俺はおっさんと同居生活——っ！？いやだっ！絶対に嫌だそんなのっ！！ぜってえ今日入り口見つけなくちゃいけないじゃんっ！」

「ああっ、俺とわくわくどつきどきの同居生活がスタートするのが嫌なら、入り口を今日中に見つけなくちゃいけないぞっ？」

「嫌だあ——っ！！わくわくでもどきどきでもねえよそんなのっ！わくわくなのはおっさんがいなくなってたときで、どきどきなのは減っていく食料じゃねえかっ！！」

「何だか俺、メリット無いなっ。何だかへこんだぞっ？」

「あつたりまえだろうがっ！お前らなんか、いつちゃあ人間のもの盗んで生活してる只の盗人じゃねえかっ！」

「ああっ？言ってくれるじゃねえかっ！そんなこと言ったら、人間だって俺たちの住む地球を破壊してるだけじゃねえかっ！」

「ああっ？だから今エコに取り組んでんだろうがっ！夏はエアコン29度っ、冷蔵庫にカーテンも付けて、今時珍しく家にパソコンが無くっ、それで冬は暖房無しだっ！」

「それっ、ただお前が金無えだけじゃないかっ！」

「なんだと——っ！！」

そんな言い争いをしていると、教室のドアががらつと開いた。それに吃驚して俺がドアの方を見ると、そこには、俺の見知った顔があった。

「おっはよ——っ！ねえねえっ、さっき誰と話してたの？怒ってたみたいけどっ」

なんとそこにいたのは、朝から相変わらず元気でとっても可愛い——東の姿だった。

「あっ、東あっ！！」

俺は思わず吃驚して叫び声を上げてしまった。

「そうだよ？……あれっ、まさか私、何かいけない事した？……言い争ってたの男の人だったけど、……まさか彼氏さんとか？」

俺はどんな誤解をされてしまったんだ。

「いつ、いやっ！そんなわけ無いだろうっ！とっ、友達だよ、友達っ！さっき帰ったんだっ」

「ふうんっ、帰ったと見えなかったんだけど……。喧嘩は良くないよっ？浮気したの？」

だから、俺はどんな人間だと思われてんだっ！？確かに彼女はいいけどっ、そっちには走らねえよっ！

「だから友達だっ！ちよっとその……、価値観の相

「違で・・・・・・・・」

地底人と地球人、どちらの方が生きている価値があるのかという。

「目玉焼きにはソースか醤油かみたいなの？」

「そんな新婚さんみたいな理由じゃねえよっ！」

だからっ、なんで俺はそっちに勘違いされてんのっ！

「そっ、それはそうとっ、なんで東はこんなに早く登校してんの？まだホームルーム全然始まらないぞ？」

そう、まだホームルームまで40分ある。俺はいつもはテレビを見ながらだったらと支度するのに、今日はおっさんがいるから早く支度を終えて早めに来た。しかし、普通の人が何も用事無いのにこんなに早く来るのは少し可笑しい。何か理由があるはずだ。

そんな話をしているうちに、おっさんは机の中に避難していた。そんなおっさんを俺はちらりと見て、後ろに手を回し、指をちよいと振って合図を出す。すると、合図を分かってくれたようで・・・・・・

・・・・・・・・スルメを、差し出してくれる。

違う——っ！！今のは俺の掌に乗れって意味だよっ、東が来て、今日中に入り口を見つけることになった以上、教室から逃げんだよっ！！

すると、合図を間違えた事に気づいたおっさんが、スルメをしまって・・・・・・・・・・

・・・・・・・・イカの薫製を出してくれた。

違う——っ！！イカの種類が違うんじゃないっ！しかも何でそれ持ってたんだよっ！それスルメと共におつまみ詰め合わせに入っ

た俺のイカ薰なんだけどっ！なんで当たり前そうにお前が持つてんのっ！！

そんなことをしているうちに、東が理由を話し出した。

「ああ——っ、うんとねっ、私の家に泥棒が入ってね——っ、それでそれをお母さんが投げ飛ばして捕まえてね——っ、それで朝から警察が来て五月蠅かったからね——っ、早めに学校に来たの——っ！」

東の母さん何者なんだ？とか、まあいろいろと聞きたいことはあったが、今それを聞いている場合では無い。早く教室から出て、出来るだけ早く入り口を見つけなくてはっ！

「そっ、そうなんだっ、大変だったねっ。泥棒が捕まって、何も盗まれなくて何よりだよっ！じゃっ、じゃあ俺はちよつと用事があるから、じゃあねっ！」

そう言つと、俺はおっさんを鷲掴みにして教室を飛び出していった。後ろで聞こえてきた、

「……………彼氏に謝りに行くのかな？」

という言葉は無視しよう。

……………東にはもう一生彼女になって欲しいなんて希望は持てなくなった気がする。

そんなことを思い、とほほと思いながら、手の中で藻掻くおっさんを持って俺は教室を後にした。

「がはっ！！殺す気かつ！！潰れると思ったじゃねえかつ！！」

廊下に出て、おっさんを放し、ポケットに入れると、おっさんが凄い剣幕で怒ってきた。

「ああっ、わりいわりいっ、だっておっさんが俺の合図分かつてくれねえんだもんっ！」

そんなことをぶつぶつと言いながら歩いて行く。俺は当たりをきよきよと見回して、そしておっさんに尋ねた。

「なあ、おっさんっ。入り口の出る場所の手がかりとか、何か無いの？」

そう尋ねると、おっさんが思い出したように答えた。

「ああ、人の多いところには現れない。だから、教室と職員室の可能性は低いと思うぞっ！」

「おおっ！そのヒントは有り難いっ！」

俺はそのおっさんの言葉に、いくらか搜索範囲が狭まったことに少し安心した。

そうなれば、探すところは限られてくるだろう。

そう考えて、まずは空き教室から散策を始めようと動き出すと、おっさんが言葉を付けだした。

「ああ、あと俺は入り口の半径5mに入ると入り口の気配が分かって、3mに入ると完全に場所が分かるっ」

「ああ——っ、うん…………、有り難いような、必要ないようなイベントありがとう……………」

そう言つと、早速俺らは入り口の搜索をし始めた。

第七話 おっさんは埃だらけ

キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン——ッ……………。

ホームルームを知らせる鐘が響く。そんな時俺は、机に突っ伏していた。

結局、二階と一階の空き教室を探したが、芥とがらくたと教材といちゃつくカップルしか見つからなかった。……………気まずかった。朝から嫌なものを見てしまった。彼女のいない俺にとって、カップルは目に毒だ。

「わーっ！綺麗なネツクレスっ！」「君の方が綺麗だよっ」「どの便器よりもなっ」「おいっ！おっさんっ……………。あはははーっ……………。失礼しましたっ！」

……………今考えても気まずかった。おっさんが余計なこと言うからっ！

そして俺の頭を悩ます張本人は、俺の机の中でするめイカとイカ薰とイカそうめんと戯れていた。あれっ？増えてるっ。いつのまに？

これで、朝の貴重な時間は空振りに終わった。すると、後は昼休みと放課後しか時間はない。学校が8時には完全下校となるので、その前までに見つけられなければ、おっさんとの同居生活決定だ。……………絶対に見つけなくては……………。

先生が来て、朝礼の挨拶をする。今日のホームルームは、特に何の連絡もなく終わった。

「おいっ！山本聞いたぞっ！」

先生が教室から去っていったとき、後ろから声が聞こえた。後ろ

の席は印南だ。

後ろを振り向くと、驚いた表情で俺を見ている。

「何を？」

俺は何も心当たりが無く、印南に聞き返した。

「お前っ、男が好きだったのかっ！」

何だかとてもない噂が猛スピードで広まっていた。

「はあっ！？んなわけないだろっ！」

俺がそう言っていると、印南がこれまた不思議そうな顔をして尋ねる。

「えっ！違うのかっ！俺は日本史の中島先生と出来てるって聞いたんだが……」

とんでもない以上に、酷い禁断の恋だった。

「なんでそんな危ない橋渡んなくちゃいけないんだよっ！んなわけないだろっ！？俺はきちんと女子が好きだっ！」

そう叫ぶと、クラス中が俺のを見た。

笑う人8人、軽蔑の目で見る人12人、舌打ちする人11人、驚く人6人、怒る人3人、無視する人2人。

反応がまちまちでもとても怖い。此奴らは俺に何を期待してたんだ？そしてそれぞれ自分の作業へ戻っていく。

「なーんだっ、女が好きなのかっ」

印南が肩を落としていた。此奴も何の期待をしてたんだ。

「当たり前だろっ？そりゃ、彼女はいないけど、男には走らねえよっ」

「まあ、考えてみりゃそっかつ。お前、この前今気になってんのは、あず・・・・・・・・・・」

「いつ、印南っ！それは言うなっ！！」

俺は必死に印南の口を塞ぐ。・・・・・・・・危なかったっ。此奴な
ら言いかねないからな。教室にいるっていうのに。

必死に口を塞いだ俺を見て、印南は理由を理解し、手を除けた。

「ああーっ、ごめんごめんっ！ここで言うのは不味かったな。でも・・・・・・・・・・」

そう言っつて印南は視線を教室の隅に動かした。俺はその視線を追っつてその先を見る。すると、友人たちと話をする東の姿が見えた。

「でもっ、ほんとに山本君がねっ、男の人と価値観の違いで争ってたんだっつてばっ！本人もそうだって言っつてたもんっ！それにね、その相手の男の人の声が、大人の男の人みたいな声だったんだよーっ」

「うっそーっ！」

「じゃあ、強ち噂も間違いじゃ無いかもね・・・・・・・・・・」

「噂は暫く消えないし、東の誤解を解くのは難しいと思うぞっ？」

「……………あはっ、あはははは——っ……………」

教室の隅でそんな会話を繰り広げる女子たちを見て、俺はもう暫く、彼女は出来ないだろうと思った。

一時限目 現代文

さっそく、今日の授業が始まった。俺は文系クラスにいるから文系教科は多めにある。

俺は数学が苦手なので、数学が少なくて本当に良かったと思う。理系の週7の数学なんか、あれは地獄の何者でもないと思う。因みに、今日の現代文は評論である。

おっさんかというと、勝手に俺の携帯でワンセグを見ていた。

何勝手に見てんだよっ！と言いたいところだが、しかし大人しくしてくれているのでよしとしよう。……………絶対に声を出さないよ？

そう願いながら俺は授業を受ける。しかし、何となく気になって、少ししてから俺は何気なく机の中を覗いてみた。するとそこには、エクササイズに勤しむおっさんがいた。

おいっ！確かに声を出すなと願ったが、体を動かして良い訳じゃないからっ！通りでさっきからたとたと音がするわけだっ。

画面に映っていたのは、『弛んだ体を引き締めるっ！メタボに負けるなっ！エクササイズ特集』と書かれた番組だった。

……………んまあ、やりたくなるのはわかるよっ。分かるけどっ！

……………大人しくしてろっっ！おっさんっ！

俺は飛び跳ねるおっさんを握りしめた。

二時限目 英語

次の授業が始まった。さっき人気の無い場所によく言い聞かせたからいいが、今度は絶対に騒ぐなよっ！

おっさんはただ今ぶすつくれながらNHKの英語講座のテレビを見始めた。

よし、その番組で騒ぐことは無いだろう。俺は安心して授業を受け始めた。

「無生物主語構文は、日本語には無い発想なので訳すときに注意しなくてはならない。この文章、*Ten minutes walk will take you to the station.* は、直訳だと『十分の徒歩があなたを駅に連れて行きます』となるが、それでは日本語が適切ではない。なので、この文章の適切な訳し方は、『駅まで徒歩十分です』もしくは、『十分歩けば駅に着きます』というのが適切であり……」

しかし、先生の言葉を聞いているのはとても眠くなってきた。……実は先生たちって催眠術を使えるのではないのだろうか？ それにこれこの前聞いたし。

そんな事を思いながら、俺は睡魔に負け、少しばかり寝ることにした。五分くらい寝ても大丈夫だよ……。今のところ分からない所も無いし。

俺は机に突っ伏して目を閉じた。ああ、眠い……。

寝始めて暫く。そろそろきつと五分だろうと思いききようかと思いはじめると、俺のすぐ近くで声が響いた。

「……………もっ、もうそんなに食べねえよ……………母ちゃん……………むにゃ……………」

はっ！俺が急いで顔を上げると、みんなが一斉に俺の方を見ていた。笑うものと退くものの半々。俺は顔を赤らめる。

「ちっ、違うつ！俺じゃねえっ！」

しかしこのクラスには信用してくれるような奴はいなかった。とんだモラルの低い、人に優しくないクラスだ。

「・・・・・・・・山本・・・・・・・・」

そんな俺に印南が後ろから話しかける。

そうだっ！まだ此奴がいたっ！此奴なら、みんなとは違う反応を・・・・・・・・。

「・・・・・・・・何食ってたんだよっ」

予想外の反応だった。

「だから俺じゃねえってっ！」

俺はそう言つて怒鳴る。すると先生が咳払いをした。

あっ、やべえっ、今授業中じゃんかっ！確か英語の木村先生は怒ると怖いとか・・・・・・・・。

俺は息を飲んで先生を見る。すると、先生が俺に向かって話し出した。

「山本っ、正直に潔く白状しろ・・・・・・・・っ。いつたいお前は母親に何を食べさせて貰っていたんだっ！」

おかしなところで怒られた。そう言えば、木村先生って真面目に

天然なことでも有名だっけ。あと、何故か食べ物にはとても食いきがいい。

俺はもう後には退けないと思った。こうなったら、適當なことを言つてこの場を何とか丸く収めなくてはっ！

そう思い、俺は必死に正しい解答の選択肢を考えていた。そう言えば・・・、確か木村先生の大好物はオムライス・・・っ！

俺はついに解答を見つけ出し、先生に向かって言い放とうとした。

「実はっ、俺が夢で母親に食べさせて貰っていたのはっ、」・・・
「母ちゃんのミルク・・・」なんですっ！つてえええっ
!?!」

重要なオムライスの部分に、誰かの寝言が混ざつて大変なことになるてしまった。これじゃあ俺は変態じゃんかっ！

クラスの全員が退く。・・・それは正しい反応だろう。

「・・・山本・・・」

後ろで印南が俺のことを叩いた。

「だからっ！これは違・・・」

「・・・なんか、ごめんな」

印南が俺のことを申し訳なさそうな顔で見てきた。何だか悲しくなってくる。

そんな時、先生がまた咳払いをした。俺は前を向く。今度こそ、長い説教が始まっても良いだろう。そう思い、先生の話し出すのを待つ。すると、先生が話し始めた。

「さて、先ほどの名詞構文の話の続きだが・・・・・・・・・・」

先生は、俺を見捨てて授業を始めた。

完全無視かよっ！説教の方が良かったんだけどっ！もの凄い恥ずかしいんだけどっ！

俺は、今日何度目かの屈辱を味わった。・・・・・・・・今日は厄日なのか？

そんな俺の机の中では、英語講座を見ていて寝てしまったおっさんが横たわっていた。

三時限目 古典

何とか三時間目が始まった。俺は酷い誤解をいろいろとされたままだ。しかもまたおっさんを人気のないところで問いただしたところ、夢で母ちゃん（妻）とこの前牧場に行ったときの夢を見ていたらしい。つまり母ちゃんのミルク＝母ちゃんの絞った牛のミルクというわけだ。紛らわしい寝言を言うなっ！

ついに俺はおっさんに嫌気が差して、空き教室に監禁してきた。と言うわけで、やっと邪魔なく授業が受けられる・・・・・・・・と思いきや、先生が休んだために、授業は自習だった。・・・・・・・・周りの視線が辛い。どうにかならないだろうか？

「・・・・・・・・おいつ、山本っ！」

俺が悩んでいると、また後ろから声がかかった。印南だ。

「・・・・・・・・何？」

俺がそう尋ねると、印南が真剣な面持ちで話し始めた。

「…………お前っ、本当に変態だっただなっ」

「だからっ！違えていつてんだろ！？俺は何の変哲もない、普通の男子高校生だっ！」

俺はそう言っで怒鳴った。すると、クラスの人たちが俺を見る。軽蔑の眼差しで。

だからっ、俺は変人なんかじゃないってっ！！何で信じないんだよっ！

「…………じゃあ、さっきのは何だっで言っただ？」

印南が不思議そうに尋ねる。まあ、それもそうか。確かにあれは酷いからな。

そう思っで、俺は弁解し始めた。

「あれは違っただっ！母ちゃんのミルクじゃなくて、母ちゃんの絞った牛のミルクの間違っただっ」

それは事実だろう。寝言の張本人が言っただから。俺は嘘は吐いていない。

しかし、印南の表情はまだ晴れなかった。

「…………でも、俺思っただけど、最初否定したのはなんでだ？そりゃ、恥ずかしだろうけど…………、それなら何故後になっで話し出した？最後まで否定すりゃいいのに」

それは印南の言っとおりだろう。考えて見れば途中で話し出す必要も無かったかも知れない。そう思っながら、何とか弁解しようとして話し出そうとする。しかし、その前にまた、印南が話し始めた。

「ああ、それと・・・・・・・・ずっと気になってたんだが・・・・・・・・
・・・・・・・・、お前の声と少し違かったよな？あれはなんでだ？」

それをいつちやあお終いだ。

「そつ、それは気のせいじゃないかな？そつ、そのつ・・・・・・・・
俺ちよつとこの前から風邪気味だからっ！こほこほっ！もしかしたらそれじゃない・・・・・・・・？」

俺は咄嗟にごまかそうとした。何が何でも、おっさんのことは誰にも言えない。というか、言ったら今度は俺は頭の可笑しい人だと思われる。

しかし、印南は手強かった。

「じゃあ、なんで朝走ってきたりしたんだ？あと、何故今は普通に話せてる？」

そこを突っ込むなよっ！

もう俺にはごまかすことは出来ないかも知れない。どうするべきかと必死に悩み始める。と、その時、聞いたことのある声が聞こえた。

「おいっ！あんな狭くて汚え所に閉じこめるんじゃないよっ！謝ったんだから許せよなっ！全く・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっ？」

俺は自分の机を振り返る。

するとそこには、俺が閉じこめて来たはずの、少し埃で薄汚れた

おっさんの姿があつた。

第八話 おっさんに人権を

「・・・・・・・・たぐつ、俺をあんな汚いところに閉じこめやがつて・・・・・・・・つ。お前は人権尊重と言う言葉を知らないのか？死ぬかと思ったじゃねえかつ！」

後ろを向くと、そこには埃で汚れたおっさんが俺の机によじ登って来ていた。俺はそれを見て、思わず一目散におっさんを握りしめる。

「んぎゃあつー!!」

そんなおっさんの断末魔を聞きながら、俺はそろそろと印南の方を振り返った。冷や汗が流れる。

「・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・、見た？」

俺は恐る恐るそう尋ねる。と印南が不思議そうな顔で俺の顔をまじまじと見た。

「・・・・・・・・何を？」

それを聞いて俺はほっとした。どうやら、ぎりぎりセーフだったようだ。俺は安心して肩を落とす。と、俺の前の席にいた奴が、俺に話しかけてきた。

「・・・・・・・・なあ、お前が握りしめてるそれ・・・・・・・・、な

に？・・・・・・・・さつき動いて喋ってたように見えたんだけど・・・」

「やつ、やだなーっ！気のせいだよーっ！疲れてるんじゃないのーっ！田中くーんっ！」

俺はそう言つて田中君の頭を思いつ切り叩いた。すると、田中君が机に突っ伏したように急に倒れる。

「田中ーっ！？どうしたんだよ急にっ！おいっ！・・・・・・・・」

「急に倒れたぞっ！？あれっ？此奴白目むいてんぞっ！」

「おいっ！田中っ！起きろよーっ！！」

少し叩きすぎたか？しかし、俺の犯行現場は見られていなかったようだ。俺は周りをきよろきよろと見渡したが、俺の犯行現場を見た奴も、おっさんを見たらしい人も居なかった。・・・・・・・・ここは、このまま何とか乗り切らなくては。ごめんっ、田中君。

「・・・・・・・・田中どうしたんだ？」

「田中君寝不足だつて言つてたからなーっ！それじゃないっ？」

印南が今し方倒れた田中君を心配そうに見る。それを何とか俺はごまかそうとする。

しかし、やはり印南は手強かった。

「寝不足？いつそんな話したんだ？第一、お前と田中が話してるところをあまり見たことないんだが・・・・・・・・」

「けっ、今朝トイレで会ったんだよっ！その時、田中君のシャツが裏表逆だったから教えてあげたんだっ！そっその時、そんな話をしたんだよっ！」

「・・・・・・・・あれっ？でも田中って今日チャイムギリギリに教室に滑り込んできたよな？」

「きっ、きつとシャツをひっくり返すのに戸惑ってたんだよーっ！」

「・・・・・・・・そうか」

印南が若干腑に落ちないような顔を見せながらも、納得の返事を俺に返した。それを聞いて、俺はほっとする。

しかしそんな時、印南が思い出したように話し出した。

「それはそうと・・・・・・・・お前は俺が何を見たと思ったんだ？」

焦って聞かなければ良かった。

後悔したがもう遅い。ここは何とかごまかす方向で。

俺はまた適当な出任せを考え始めた。

「・・・・・・・・人に見られたくないものだろ？というと・・・・・・・・」

。

俺は頭をフル回転させて、答えを導き出した。

「・・・・・・・・らっ、ラブレター・・・・・・・・」

最終的に、あるはず無いものを作り出した。

印南の表情が段々変わっていく。

これは、不味かった。俺がラブレターなんて貰えるわけ無いっ！俺が必死に嘘だとばれないでくれと願っていると、印南が口を開いた。

「・・・・・・・・中島先生からか・・・・・・・・」

だから違うーっ！！俺中島先生と付き合っただけだし、ラブレターも貰ったことねえよっ！！

そこから頭を離せーっ！！あと、何で決定的にラブレター！！中島先生なんだよっ！！せめてクエッションマークくらい付けろよっ！！俺はそんなことを心で叫びながら、その思いを口に出した。

「だから違うってっ！！しかも今思ったけどなんで中島先生なんだよっ！」

「えっ、違うのか？てつきり・・・・・・・・。何か聞いて悪かったと思い始めてたんだが・・・・・・・・。ん？お前知らないの？中島先生って男喰家で有名じゃなかった」

そう言っただけで印南が不思議そうな顔を見せる。

「まじ！？あと男喰の喰違えよっ！食だからっ、それじゃあ、人喰いの化け物みたいだろっ！？」

俺は何か主旨がずれていつている気がしながらも、その言葉を発した。

中島先生、そんな噂が流れてたのか・・・・・・・・。だから俺はこんな事になってしまったんだ・・・・・・・・。どうでもいいことでおっさんと言ひ争わなきゃ良かった・・・・・・・・。

そんな後悔を胸に抱きながら、俺は溜息を吐く。と、印南がまた

話し出した。

「で、じゃあ誰から貰ったんだ？お前が、ラブレターなんて」

ますます溝に填っていつてる気がする。

そう思い俺は顔を引きつらせ、ははははと笑い出す。

そんな疲れ切った顔を見せながら、俺は何とか溝から抜け出そうと考えを巡らせていた。

「……ラブレターなのだから、男子は出せない。かといって、今適当な女子の名前を挙げると、また噂が急速な勢いで流れ、その子が迷惑するだろう。……そうすると、噂が本人の耳に届かず、女子で、俺の知っている身近な人物……」

俺は思考を巡らせ、そして一つの人物の事を思いだした。

「……ねっ、姉さん……」

そう言つと、印南は急に悲しそうな顔になって、俺の肩を叩いた。

「……お前も、苦労してたんだな。……まあ、なんだっ。……姉貴は泣かすなよ？」

俺が填つたのは溝じゃない。底なし沼だ。

違うつ！俺はそんな親泣かせなこととはしてないっ！選択を誤つただけなんだっ！

確かに姉さんのことは家族として（ここ重要）好きだが、しかし幾ら彼女がいらないからといって、身内には手は出さないからっ！第一、姉さんはもう彼氏いるしっ！

そんなことを思い、あたふたとどう弁解しようかと思っていると、そんなところに俺に声をかける者がやってきた。

「やつ、山本君っ！」

俺は焦った様子のまま声のした方向に顔を上げると、そこには東の姿があつた。

「あつ、東っ！？どうしたんだよ急にっ！俺今取り込み中なんだけど………。あと、今朝のは中島先生でも誰でもないからっ！誤解だからなっ！？」

俺はそう告げると、今は取り込み中なので、再び思考を巡らせ、今の状況からの脱却方法を必死に考え出す。

すると、しかし東は何故か人の話を聞かずに、自分の用件を果たした。

東が、顔を少し赤らめて俺に尋ねる。

「ねっ、ねえ山本君？……中島先生とは、何がきっかけに付き合つことになったの？」

君はもう何て言うことを聞いているんだ。

そう思い驚いて俺が顔を上げると、先ほどまで東が居た辺りに、数人の女子が集まってこちらをじつと見ていた。どうやら、罰ゲームか何からしい。

その言葉に俺は溜息をつき、そして答えを返した。

「あのなー、中島先生にどんな噂があつて、俺が中島先生とどんな関係だと思われてるか知らないけど、俺中島先生と付き合つてないからっ！今朝喧嘩してたのも違う人だからなっ！……さっきっから言ってるけど……っ」

俺はそう言っていていららとしながら言葉を発すると、また思案に耽り始めた。すると東がきょんとした顔をして言葉を発する。

「・・・・・・・・えっ？違うの？付き合っ^て無いの？嘘だあーっ！」

「だからっ、嘘じゃないって言ってるだろっ!？」

俺がそう言っていると、東はなあんだと言葉を漏らして肩を落とし、表情をいつもの東のものへと一旦戻した。なんだか少し安心したようにも見えた。何故だろうか？

「私、てつきり付き合ってるんだと思って吃驚しちゃったよーっ！山村君っ」

「俺は、何故東が俺の名前をしつかり覚えてくれないのか不思議だよ」

俺がそう言っていると、何故かまた、毎度の如く俺の言葉は無視された。いっつも思うけど、東って結構なマイペースだよな・・・・・・・・。そんなことを思いながら、どうやら東の誤解が解けたようだったので、俺はまたこの底なし沼からの脱出法を考え始めた。

と、しかし東の表情がまた変化していった。今度は不思議そうに歪み、頭が傾く。

そして東がまた、俺に質問をした。

「・・・・・・・・じゃあっ、今朝喧嘩してたのは誰？声からして、おじさんみたいだけど・・・・・・・・」

これは底なし沼でもない。俺を殺そうと蔓延る悪魔の罠だ。そう思っ^て俺がぐあゝあゝと短く叫んで机に突っ伏すと、何故か

印南は引つかかる事があつたようで質問をし始めた。

「・・・・・・・・なあつ、東つ。それってどんな喧嘩だったか分かるか？」

印南は何故かそう尋ねた。すると、東が今朝のことを思い出しながら、質問の答えを返し始めた。

「・・・・・・・・価値観の相異で喧嘩してたつて言うのは山岸君から聞いたんだけど、喧嘩の内容はよく聞こえなかつたんだよねーつ。・・・・・・・・うーんとつ、私が聞き取れたのはねーつ、」・・・・・・・・嫌だあ——つ・・・・・・・・わくわくなのは・・・・・・・・さんが・・・・・・・・ときで、どつきどきなのは・・・・・・・・じゃねえ」・・・・・・・・俺、・・・・・・・・無い。・・・・・・・・へこんだぞ・・・・・・・・」・・・・・・・・あつたりまえ・・・・・・・・お前ら・・・・・・・・の・・・・・・・・盗んでる・・・・・・・・じゃねえか・・・・・・・・」・・・・・・・・ああつ・・・・・・・・言ってくれるじゃねえかつ・・・・・・・・そんなこと言つたら・・・・・・・・を・・・・・・・・してる・・・・・・・・じゃねえか・・・・・・・・」・・・・・・・・ああつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・が・・・・・・・・は・・・・・・・・カーテン・・・・・・・・付けて・・・・・・・・家に・・・・・・・・無く・・・・・・・・それ・・・・・・・・お前・・・・・・・・じゃないか・・・・・・・・」・・・・・・・・なんだと・・・・・・・・」・・・・・・・・みたいな感じだったかな？途中途中しか聞こえなかつたんだよねーつ」

東が必死に思い出しながら言葉を吐く。と、印南がその言葉を聞いて少しの間考え込み、そしてなんだか苦しそくに東に言葉を發した。

「東・・・・・・・・つ。そつとしておいてあげてくれよつ。此奴もいろいろと大変なんだよつ」

「・・・・・・・・大変？何が？」

東が不思議そうに尋ねる。と、印南は言いにくそうに口を開いた。

「東には特別に教えてやるよつ。これは誰にも言うんじゃねえぞ？・・・・・・・・実は、山本の彼女は、姉貴なんだつ。・・・・・・・・今朝揉めてたのは、きつと父親だつ。姉貴とのがばれたらしい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えつ・・・・・・・・嘘つ・・・・・・・・山本君が・・・・・・・・お姉さんと禁断の恋・・・・・・・・」

誰か炎で悪魔の罟を焼き払って下さい。

・・・・・・・・何か俺悪いことしましたかっ！？神様っ！

そんなことを思いながら、俺は反論を諦めて、机に突っ伏したまま動かなくなつた。

暫くすると、教室に授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

第九話 おっさんの家族愛宣言

俺は気を取り直して昼食を取ると、おっさんを握りしめて近くの空き教室へと来ていた。

この学校は他の学校には珍しく、午前授業3時間後に昼休み、そして午後の授業が3時間、もしくは日によって4時間となっている。因みに今日は六時間授業の日だ。

今は運良く空き教室には誰もいなかった。俺はそれを確認すると、おっさんを適当な机の上に置き、軽くとんと叩いておっさんを起こした。

「……………あーっ、今度こそ死ぬかと思ったあーっ！お前に会ってから俺は何回生死の間を彷徨ったことかっ！お前と居ても良いこと無えな本当っ。ああーっ、早く家族に会いてえーなあーっ！」

「殆どおっさんが悪いから死にそうになってるだけじゃんかっ！俺もおっさんと居て本当良いことねえよっ、ああ、本当災難だーっ。俺がこの先彼女出来なかつたらお前のせいだからなーっ！」

「それはお前の顔と地味さと頼りなさと、お前の全てが原因だっ！俺のせいにするなっ！」

「なんだとっ！まっまあ、じっ、事実だけどっ！少し夢ぐらい見させろよっ！」

そんな事を言いながら俺たちは睨み合い、そして何も解決をうまないことを思っただけ溜息を吐いた。時間の無駄だ。それにまた何かの勘違いが起こったらたまらない。

そう思つて俺はおっさんに今後の予定を確認し始めた。

「で、この昼休み中は何処を探せば良いんだ？えっと、1階と2階の空き教室は見たんだから、3、4階の空き教室と・・・・・・・・」

「出来れば特別教室も少しまわれたらいいなつ。そしたら放課後に、残りの特別教室と体育館なんかの別館施設、それに校庭や野球場にテニスコート・・・・・・・・を見ればいいんじゃないか？この学校でつけえけど、そんなもんだろ？」

俺はそのおっさんの言葉に気が遠くなりながら頷いた。

「はあ・・・・・・・・まあ、そんなもんだねつ・・・・・・・・因みに、特別教室は、理科関連が八教室、社会関連が四教室、国語関連が二教室、数学が二教室、英語関連が二教室に家庭科関連が四教室芸術関連が四教室・・・・・・・・、後は、保健室が二部屋、図書室に講談室に進路指導室に会議室に礼法室にパソコン室に書道室・・・・・・・・位か？」

別館施設は、体育館、ホール、柔道場、剣道場、弓道場、講談館、卓球場・・・・・・・・。そしてその他は、校庭にテニスコートにサッカー場に野球場・・・・・・・・かな？・・・・・・・・この学校いつも思ふけど異常なほどにでかいよなつ・・・・・・・・。気が遠くなりそうだ・・・・・・・・」

俺が気が遠くなりながらそう話すと、おっさんも嫌そうに顔をしかめる。

「・・・・・・・・なんなんだここはつ、立派な偉え学校だとは思っていたが、そんな馬鹿でかいマンモス校だったのか・・・・・・・・」

しかしおっさんは次の瞬間拳をぎゅっと固く握ると、決意を固めたように言葉を吐いた。

「だがまあ、どうせやらなくちゃいけねんだっ、もしかしたら半分も回る前に見つけるかもしれないなっ。……よしっ！ 気合いを入れて頑張るぞっ！ これも家族へ会うためだっ！」

それを見て、俺も決心を固め、ぎゅっとガッツポーズを取った。

「ああっ！ これもおっさんとの共同生活を絶対防ぐためにっ！」

「頑張るぞっ！」

「頑張るぞーっ！」

「おお——っ！！」

「おお——っ！！」

俺らはそれぞれの拳を天井に向かって突き出し、そして気合いを入れるために元気よく叫んだ。

——互いと一秒でも早く別れるために。

「ところで……、」

「……ん？」

そこで、おっさんが俺に向かって話しかけてきた。俺は、おっさんを首を傾げて見る。するとまたおっさんが言葉を続けた。

「これは、俺を介しての作者からの伝言なんだが……、」

「はあ？作者？なんで今更っ？それにそんなことここで言うて良
いのか？今までそんな描写は一つもなかったのに、突然出てきて・
・・・。あの体たらくでろくでなしの怠け者のちび・・・・。
・。ああっ！ごめんなさいっ！俺を消さないでくれっ！すみませ
んでしたあーっ！」

俺は取り敢えず上の方に向かって謝罪の言葉を叫ぶ。

・・・・。危ねえっ、危うく存在を抹消されるところだった・
・・。

俺がそんなことを思っていると、おっさんが話を続ける。

「それは別にいいんじゃないかってっ。どうせ大した人数この小
説読んでないだろ？大勢にばれなきゃいいんだ、ばれなきゃ・
・・」

「そんなかんじの台詞、他の何処かで聞いた事があるような・
・・、まあいいやつ、それはまあ、事実だからなっ・
・・。っておいっ！！なんで今俺を消そうとしたんだよっ！何で俺
はそれを言っちゃいけないんだっ！？お前が言っただろっ、おい
っ！」

そんな言葉を叫びながら、しかしおっさんは言葉を続けた。

「一つ質問だっ！・・・・。お前の下の名前って・
・・・。っ、何？」

「・・・・。」

俺は言葉を失った。

作者にも見放された俺は、校舎内を歩き回っていた。

「……まさか作者が俺の名前を毛ほども考えていなかったとは……、主人公の名前が一向に出てこないこの小説って何なんだよっ！しかもおっさんに至っては、名字さえも出てきてないぞっ！？……こうなったらデモだっ！絶対えこの物語終わっても言わないからなっ！」

そんな決意を胸に抱きながら、俺は歩く。

今日は急いで昼食を3分で済ませたから、まだ時間は三十分もある。今さっき三階の空き教室も確認し終わってたし、後は四階をまわって、その次は渡り廊下で特別棟に向かおう。

俺は大まかな予定を立てると、階段を上り、四階へ向かった。

教室棟四階は、主に一年生の教室だ。学年が下がるに連れて、教室は下に下がる形式になっている。しかし今思うと、俺は一年頃一つ下の階の教室だったので、あまり最上階に来たことは無かった。そんなわけで、俺は何となく新鮮さを感じながらも四階を搜索し始めた。

「……えっと、四階の空き教室は確か三つだったかな？」

俺は記憶の頼りでそれを何となく思い出すと、まずは廊下から端から順々に教室を見ていった。

空き教室はその階の学年の主に物置になっている。学園祭やその他資料やテレビや扇風機……などが置かれているが、あまりそれらは使われることが無いので、人の出入りは基本あまり無いことになっている。カップルなんか居着いたりするが、なにせよ彼女の居ない俺にとっては必要のない部屋の筈だった。なの

で今日こんなに空き教室に入るのは、最初で最後になると思う。．．．．．
ああ、どうせなら女子と空き教室に入りたかったなあ．．．．．

例の如く、おっさんは俺の胸ポケットの中に潜り込んでいる．．．
．．．あれっ、筈だったんだけど．．．．．
いない．．．．．？

あれっ！？おっさんがいないっ！！

俺はそれに気づくと、突然辺りをきょろきょろと見回し始めた。
その俺の突然の行動に、一年生たちが不審そうな目で見てくる。

しかし俺はそんなことは気にせずに、おっさんを探しまわった。
どっかで落としたかなっ！？やばいぞっ！あれが他の人に見つかったら．．．．．

そう思い、俺は顔を青くする。と、しかしその時、何処かで聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「うわっふおーいつー！あの子は水色っ！あっちの子はピンクだあーっ！！」

そんな変態めいた声が聞こえてきた。俺はその声にハッとして、
声の聞こえてきた方向——俺の足下を見る。

と、そこには案の定——真っ赤な鼻血を垂らした、俺のズボンにひつつているおっさんがいた。

「うわっ！！おいっ、おっさんそんなところで何してんだよっ！！」

俺は思わず声をあげる。周囲の人たちが俺のことを驚いた様子で見つめた。

と、おっさんがその声に気づくと、ばつが悪そうに顔を歪ませた。

「げっ、ばれたっ！！パラダイスだったのにつ！ちくしょーっ！」

「おっさんっ！さっきの家族愛発言は何だったんだよっ！？やっぱり只の変態オヤジじゃねえかつ！」

「違うっ！俺は断じて変態じゃないっ！只のしがないサラリーマンだっ！」

「お前はサラリーマンじゃなくて盗人だろうがあっ！」

おっさんは俺に気づくと、突然大ジャンプをして近くを通った女子生徒のスカートの裾に飛びついた。

俺はそれを見て、しくじった、といった顔をした。おっさんは鼻血を垂らしたまんまのその表情で叫ぶ。

「ちつと位いいだろっ！？放課後頑張って探せば十分間に合うさっ！」

「間に合わなかったらどうするんだよっ！？だから早く探しに行くぞっ！」

「いやだあーっ！もう少しだけ良いだろーっ!？」

嫌がるおっさんを余所に、俺はおっさんを追いかけた。そして、追いつくとおっさんに向かって手を伸ばす。

そして、思いつ切り掴んだ。

「姿見られたらどうすんだよっ！ほらっ、早く行くぞっ！」

「いーやーだぁーっ！俺はアガルタに行くんだぁーっ！」

しかしおっさんは手を離さない。と、その時ちらりと顔を赤らめる女子生徒の顔が見えた気がした。

しかし俺はそんなことに構わず、おっさんを引つ張り続ける。

「んぬぬぬうっ！行くぞっ、おっさんっ！」

「んぬぬぬうっ！いやだぁーっ！！」

するとその時、

『ぶちっ！！』

何だか嫌な音がした。

そしてその瞬間、何だか引つ張っていた物が軽くなり俺は尻餅を付いた。

「いててててえっ・・・・・・・・」

俺は打った尻をさすりながら正面を向く。

と、そこにあったのは、スカートのずり落ちた女子生徒のパン・・・・・。

「「「いやあああああっっ！！」」

「「「うおおおおおっっ！！」」

その時、二種類の叫び声が響いた。その瞬間、俺の頬に途轍もな

い衝撃が来る。

「きゃああああっつ！！変態っつ！！」

それは、その声と共にやってきた女子生徒の平手ビンタだった。

「いつてえ——っ、ああ——っ、酷い目にあっつ。全部おっさんのせいだからなっ！」

「だって見たかったんだもんっ！それに直接スカート下ろしたのはお前だろーっ」

「だけどっ！原因は全部おっさんにあるんだからなっ！」

俺はあの後、途轍もない悲鳴と歓声と投擲された物体に当たりながら、それでも取り敢えず空き教室の中を確認して命辛々逃げ、そして特別棟へ来たところだった。

……ああ、死ぬかと思った。そして今日で俺の評判は酷い事になったと思う。

俺はそんなことを泣き泣き思いながら、特別棟の端から探索を始めていた。

礼法室と書道室は鍵がかかっていたのだが、小さな窓だけ開いていたのでおっさんに探してきて貰った。しかし、何もなかったようだ。

お次は美術室に行ってみた。何故かリアリティ溢れる生首や指や血文字が丹念に作られて無造作に置かれていたが、しかしそれ以外

は特に変わった様子は無かった。

・・・・・・肝試しにでも使うのだろうか？

そして次は音楽室。目が動くベートーベン・・・・・・は居なかった。代わりに、目が泳ぐ男子生徒がいた。どうやら、メトロノームを落として壊したらしい。・・・・・・あーあ。

その他に、自主練習をする人や、息抜きにピアノを弾いている人たちが居たが、その他変わった様子は無かった。・・・・・・あつ、メトロノーム落としたのばれてる。怒られてる。お気の毒にー・・・・・・。

そしておっさんかというと、どうやら楽器はあまり見ない物のようで、物珍しそうに見物していた。

カスタネットを見つけては踏んでみそして跳ねてみて、タンバリンを見つけてはまたその上で飛び跳ねてみる。

そして次におっさんはバイオリンを見つけて・・・・・・。その上で飛び跳ねた。

俺はそれを見て慌てて止めに入る。・・・・・・さすがにそれは不味いっ！

しかしそれは少し遅く・・・・・・その時弦が見事にバチンっ！と切れて、そしてその衝撃でおっさんが弾き飛ばされていった。俺はそれを見て慌てておっさんの飛んでいった方向に駆け寄る。

突然の出来事に、周囲がざわつき始めた。俺はそれを見て焦る。・・・・・・どつどつしよつ、バイオリンの弦つてきつと高いよなっ？もし俺のせいになったら・・・・・・。・・・・・・弁償出来ない額だったらどうするんだよっ！

俺はそう思いさらに慌てると、おっさんを見つけて握りしめ、直ちにそこを飛び出していった。

不審そうに俺を見る者が何人かいたが、幸い俺自身はバイオリンから少し離れた場所にいたので犯人は免れたようだ。・・・・・・はあ、よかったあーっ。

そして代わりに、一番近くにいたあのメトロノームを壊した男子生徒が犯人にされた。．．．．．ごめんなさいっ、許して下さいっ！でも俺のせいじゃ無いんだけどねっ！

そしてそんなこんなで特別棟4階の教室は全て確認し終わった。取り敢えず、ノルマ達成だ。．．．．．結局何も見つからなかった。あのスカートの女の子とメトロノームの男の子には悪いことしたなあ．．．．．

俺は4階を回り終わると携帯を開いて時間を見る。．．．．．と、後次の授業まで三分しかなかった。

「えっ！時間ぎりぎりじゃんっ！間に合わなかったらやばいぞっ！？」

俺はそれを見ると驚いて階段を猛スピードで駆け下りていった。

次の授業は地学室だ。教科書なんかは印南に全て頼んでおいたから大丈夫だろう。

地学室は一階。ぎりぎり間に合うか．．．．．っ！？と思った瞬間、しかし俺はあることに気づいた。

．．．．．っ！？おっさんがまた居ないっ！？

しっかりとさっきまで握りしめていた筈なのだが、何故かそこからおっさんは居なくなっていた。しかしさっきの騒動でおっさんはまた気絶していたから自分から動く筈はない。落としたのかっ！？俺はその事実には驚いて、周辺を見渡した。しかしおっさんは近くに落ちていなければ、当然ズボンにしがみついても居ない。

俺はおっさんが見つからないことと授業に遅刻しそうなことになり焦り始めていた。．．．．．どうしようっ！？あれが他の人に見つかったら．．．．．っ！

その時、俺は前方に先生が居るのが見えた。．．．．．あれは、

これから授業をしてくれる地学の野崎先生だっ！ズラがよくずれているのにズラじゃないと断じて言い張る事で有名な、ノーズラ先生だっ！

俺はそれを見て少し安心する。先生がまだあそこに居るんなら、まだ充分に間に合うかもしれないっ！

俺はそれを見て、仕方なくおっさんのことは諦めて授業に向かうと考えた。

……授業の遅刻はまずいからなっ。おっさんはきっとその内何とか戻ってくるだろう。

そう考え、俺は先生の後を追う。と、その時、

俺はおっさんを見つけた。

——野崎先生の頭の上で。

なああああっ！？なんでそんなとこにいんだよおっさんっ！？

偶然俺は先生を追いかける過程でその頭の上におっさんを見つけた。

おっさんはさっきの一連の騒動でまだ気を失っているようで、しかししっかりと野崎先生の髪ズラの毛を手握ズラっていた。

おっさんが野崎先生が歩くことに頭の上からずり落ちていく。そしてそのせいで、おっさんと共にズラがずり落ちていくのが見えた。絶体絶命とは、まさにこのような状態を言うのでは無いのだろうか。

俺はそれを見ながらかなり慌てていた。あのままではおっさんが落ちるかも知れないわ、先生のズラが完全に落ちるわ、おっさんが誰かに見られるかも知れないわ、野崎先生のプライドが無くなるわ……とにかく大変なことになる。

俺はそんな絶命的状況を想像し、そして一か八か勝負に出ることにした。

……こうなったらっ、おっさんをズラごと回収して、おっさんを素早く剥がし、そして先生が気づかないうちにズラを元に戻すしかないっ！

俺はそう決意すると、猛ダッシュで先生の所に向かっていった。地学室はもうすぐ目の前。早くしないと、手遅れになるっ！

あと少し、あと一歩っ！

俺は普段運動不足気味な体をおこして最大限の力を振り絞る。

そしてやっと、俺は先生の頭に手を伸ばし、掴むことに成功した。

………やったっ！これで何とかなるっ！よし、後はおっさんを剥がしてズラを元に戻せば………！

俺は満弁の笑みを浮かべる。それは、額に垂れた汗で輝き、まさしくそこだけ切り取れば青春の一枚ジのような光景だった。

キ——ンコ——ンカ——ンコ——ン——ッ………

その時チャイムが鳴る。そしてそれと共に暫しの静寂がやってきた。

俺は、他人を不幸にさせたくない。その一心だった。精一杯人のために頑張っつて、何とか不幸にしないようにしたかっただけだった。しかし俺は人の危機を救えるヒーローじゃない。ましてや運動能力に長けているわけでも、勉強が素晴らしく出来るわけでもない。でも、それでも俺は人を助けたかった。ただ、それだけだったんだ。

しかし、その思いが上手く届くことはなかった。

暫しの静寂の後、大勢のひっくり返るほどの笑い声が聞こえてきた。そしてその後に続いてもの凄い剣幕で怒声が響く。

そう、俺はただ、助けたかっただけだったんだ。
………こういう状況から、先生を。

俺は、地学室に入ったすぐ入り口で野崎先生のズラを思いつ切り剥ぎ取っていた。

先生が俺のことを真つ赤な憤怒の表情で見つめて、そして奥の準備室へと引きずってゆく。

．．．．．違うんですよっ！先生っ！俺は先生を助けたかっただけなんですってばっ！

俺のそんな声は、届くことは無く。俺はそんな言葉を心の中でひたすら叫んでいた。

ああ、先生の目に涙が溜まっていく．．．．．。

．．．．．今日はとことん付いてないなあ。俺．．．．．。

俺は自分の境遇を思っただれ顔で溜息を吐いた。

第十話 おっさんはお昼寝

「ああ——つ——！酷い目にあつたあ——つ——！」

地学の授業がなんとか俺が生きているうちに終わり、俺は教室への帰り道にそう言つて溜息を吐いた。
すると、隣にいた印南が話しかけてくる。

「お前確かに酷かつたなつ、気の毒だと思つてたつ。だがつ、もとはと言えば悪いのはお前だからなつ、しょうがないだろうつ。むしろ、あれですんで良かったと思つべきだと思つぞつ」

「………それもそうだなつ」

俺はそんな印南の言葉に、さっきの授業のことを思い出しながら返事をした。

地学の授業の冒頭で先生の力ツラを剥ぎ取ってしまった俺は、それから地獄のような地学の授業を受けていた。

先生が泣きながら怒鳴り散らして説教するわ、質問になるものは片っ端から俺を当てて答えさすわ、睨んでくるわ、雑用させられるわ、チヨークを投げられるわ、水をかけられるわ、足を蹴られるわ……とにかく地獄のようだった。

今日はとんだ厄日だ。一日で一年分くらいの厄が降りかかってきた気がする。

俺はそれを思い少し疲れたような顔で溜息を吐いた。
そしてその当の本人であるおっさんは、疲れたのかすすつと眠っていた。………大丈夫だよな？息してるよね？

しかし、とはいえもう今日は流石にもう悪いことは起こらないだろう。いくらなんでも厄が降りかかり過ぎている。何も俺は悪いことをしていないのだから、神様ももう俺で遊ぶのは止めて他の人を弄り始めるだろう。きつとそろそろ飽きたはずだ。

俺はそう思うと気持ちを入れ替え、よしと気合いを入れた。きつとこれだけ悪いことがあったんだから、入り口もすぐに見つかつておっさんとおさらば出来るはずだ。それまでの辛抱だ。頑張ろうつ。

そして俺は、そう意気込んで教室内へと入っていった。

五時限目 日本史

悪いことは起こらない……………はず……………だよね……………

……………？

俺は目の前の光景に愕然としていた。

あり得ない。こんな事、あり得る筈がないつ。

俺は現実逃避したくなって、取り敢えず机に突っ伏した。

ごめんなさい。俺は前言撤回します。

……………神様は俺のことが途轍もなく気に入らなくて、虐めたり無いようです。

俺はもう、何だか泣きなくなってきた。俺が何をしたというのさ神様あーっ！

そんな嘆く俺の目に映る光景は、

——教壇の上で俺の方をちらちら見て顔を赤らめている中島先生の姿だった。

どうやら噂はもうとくに耳に届いているらしく、何故か意識しているらしい。

……………俺にそんな趣味は無いって言ってんだろがぁ——
——っ！

もう、俺には何処でどんな噂がまわっているのか把握出来ていな

いが、もの凄いいろしい噂がまわっていることだろう。その噂の内
どれだけが中島先生の耳に届いているのかは分らないが、俺は確
実に誤解をされている事だろう。だって、あの先生の様子尋常じゃ
ないもんつ。なんであんなに顔赤いん？何を考えてるんだよつ。ク
ラスに噂されて騒ぎ立てられてる小学生じゃないんだからさつ。ま
してや男女でもないのにさつ！

・・・先生まだ若いんだから、ちゃんとした恋愛して可愛
い奥さん貰ってくれよつ！

俺はそう嘆きながら机に突っ伏していた。クラスの連中がひゅう
ひゅうと騒ぎ立てて居る。いい加減モラルというものを身につけた
らどうなんだつ、此奴ら。

先生はしかし気を取り戻し、授業を始めていった。・・・・・・
はあ、やっと始まった。

俺はちらつと黒板に目を向ける。すると、どうやらいつも通り普
通に授業しているようだった。そこはやはり腐っても先生らしい。
授業に私情は持ち込まないようだ。・・・・・・流石プロ。

俺はそれを見ると安心して黒板の文字を写し始めた。

えつと、『57年 漢の倭の国王が後漢に朝貢し、光武帝から印
綬を授けられる。↑筑前国志賀島出土の金印「漢委奴国王印」』

俺はそうノートを取り始める。先生は黒板につらつらと文字を書
きながら、同時に説明をしていた。

「107年、倭国王、えー、詳しくは倭面土国王が、後漢の安帝
に生口160人を献じました。そしてこの頃、倭国が乱れ、互いに
攻伐します。これが、この倭国大乱で・・・・・・」

先生がそう説明し終わると文字を書く手を止め、そして教室内に
振り返ると、教科書を片手に持ちながらまた説明の続きを口にしよ
うとした。

うんと、次は『西日本から関東にかけ、集落の周りに濠や土塁を巡らした環濠集落が増える。佐賀県 吉野ヶ里遺跡、大阪府 池上・曾根遺跡』

俺は黒板の文字を写そうと顔を上げる。と、その時先生と目がばったりあった。

先生が、恥ずかしそうにまた顔を赤らめ、そしてその時少し声の音量を弱めた。

俺もそれに何だか顔を赤らめ、そしてまた机に突っ伏した。

．．．．．なんでだよっ！なんなんだよこのシチュエーションっつ！！何だかこつちも恥ずかしくなるじゃんかっ！！そんな気は全くないのに．．．．．っ！！そして先生私情バリバリ持ち込んでんじゃねえかっ！！

俺は何だかもう嫌になつて黒板の文字を写すことを止め、そして机にまた突っ伏し始めた。．．．．．もう絶対顔なんて上げるもんかあっ！

するとそんな時、先生がくすつと笑った。そして、質問を始める。

「山本君が寝てしまいましたねっ、．．．．．今度は机と付き合っているのかな．．．．．？」

そう言つて影のある笑い声を上げた。．．．．．何これ、ヤンデレっ！？

そして先生はまだ話を続けた。

「．．．．．それとも、先生にお仕置きしてほしいのかな？」

何これっ！？Sっ！？

「．．．．．それとも、僕の授業じゃ分かりにくいのかな？も

つと分かりやすくしたほうがいいのか……。はっ！べっ、別に山本君の為とか、そんなわけじゃ無いんだからなっ！」

何これっ！？ツンデレっ！？

そして最終的に先生は俺の席までとことこと歩いてきた。……

・今度は何をしにくるんだっ！？

すると先生は俺の席まで来ると、俺の顔を覗き込んで……。そして俺の顔を少し持ち上げておでこおでこを合わせ始めた。

……。っ！？なんでだよっ！？なんでこうなったんだよっ！？

俺がそう思っただけで慌てていると、すると先生が驚いたように声をあげた。

「わっ、これは不味いっ！山本君は熱がありますねっ！早く保健室に連れて行かないと……。っ！あっ、でも今日は確か保健室の松前先生は出張だったなっ……。！ちよっと先生山本君の看病をしますので、皆さんは自習をしておいて下さいっ！」

……。やばいっ！！食われるっ！！

俺はそう危機感知すると、ぱっと起きあがって声をあげた。

「いいえっ先生っ！！俺熱なんか無いから大丈夫ですっ！授業を続けて下さいっ！……。その……。授業の内容が分からなかったんで寝ていただけですっ！」

俺は急いで熱の有を否定する。ついでに適当な理由をつけると、

先生の手を払った。

先生は驚いたように俺のことを見つめる。俺はその目を睨めつけるように見ていた。

すると、先生は根負けしたように溜息を吐いて、そして立ち上が

る。

「そうでしたかつ。寝ていたから熱が高かったのですねつ。分かりました。授業の内容が分からなかったのは僕の責任ですねつ、すみませんでした。それでは、山本君には後で分かりやすく個人授業をしてあげることによしましょうつ。それは僕の責任ですからねつ」

えつ・・・・・・・・？

俺はその言葉に疑問を抱きながら、顔をあげて先生が教壇へと戻って行くのを見ていた。そして先生は教壇へ戻ると、俺が驚いたような表情をしているのを見て、優しくくすつと笑う。

「大丈夫ですよ、山本君つ。そんなに怖がらないで。・・・・・・・・きちゃんと優しく教えてあげますからつ」

そう言つて先生は、俺に笑顔を見せた。そして俺はそれを見て、先生が教壇に戻るときに俺の手にねじ込んだ紙を開いて見てみる。するとそこには・・・・・・・・、先生の家の住所が丁寧に書かれていた。

いやああああああああああつっ！！

食われるううううううううううううつっ！！

俺はどうやらおかしな人々に好かれるようです。

神様、どうか平凡な俺の生活を返して下さい。何でもしますから、本当に。

・・・・・・・・もう・・・・・・・・・・こんなやだあ——・・・・・・・・！！

六時限目 体育

もう、正直疲れて動きたくない。しかしそんな時に限つて、今日は最終授業が体育だった。女子はバレー、そして男子はバスケット。

る。だがどうやら今日先生が居ないらしく、他の学年の先生が纏めて俺たちを見ていた。たしか、体育の先生は今日手術だつて言ってたな。無事だと良いけど。と言うわけで、俺たちは指示だけ受けて自由に体育の授業を楽しんでいた。俺はさっき試合に参加したので暫く休憩している。

そして女子バレーを見ながら、印南と雑談していた。

「ああ、今日は全く災難な一日だよーっ！付いてないどころの騒ぎじゃ無いぞこれっ、どうすんだよーっ！」

俺がそうばやくと、印南がそれに応答をする。

「……………今日は大変そうだな、お前っ。今日だけで幾つの噂が立つてることか……………。中島先生と付き合ってるとか、マザコンとか、シスコンとか、ロリコンとか、ズラマニアだとか、Mとか、受けとか……………」

「凄い量の噂が流れてると思ったが、もうそんなになつていたのか……………。噂は怖いな……………。いつになったら消えるのやら……………」

俺は溜息を吐いて、明後日の方向を見る。

するとそんな俺を見て、印南が慰めるように肩を叩いた。

「大丈夫さっ。その内消えるだろうっ。人の噂も七百五十日って言うじゃないかっ」

「……………七十五日なっ。それ結構な月日経たないと消えないぞ?。」

俺はそんなどうでもいいような会話を印南と交わしながら、女子バレーを見物していた。

そこには、東が試合に参加している風景が映し出されていた。．．．．．見た目の割に、結構東って運動出来るよなっ。．．．．．そして．．．．．、結構胸がある．．．．．。

その時ちょうど、東がアタックを決めたところだった。俺はそれを見て、少し顔を赤らめる。と、そんな時、印南が俺に話しかけてきた。

「．．．．．なあ、思ったんだけどさっ」

「ん？何？」

俺は印南の突然の発言に顔を傾ける。と、印南が俺に疑問を投げかけてきた。

「．．．．．結局お前って．．．．．、誰が好きなんだよ？」

「．．．．．はっ？．．．．．はあっ！？」

俺はそれを聞いて、思わず吃驚して立ち上がった。

しかしそんな俺に構わず、印南は話を続ける。

「いやっ、昔東が好きだって話は聞いたけどさっ、今日いろんな噂がたつたから、結局どうなんだろうと思ってさっ。．．．．．．．．．．やっぱり姉さんか？」

「んなわけねえだろっ！？」

印南が寂しそうな目でそう聞いてきた。

いやっ、確かにそう言ったけれども、それは誤解なんだよっ！

「確かにそう言ったけど・・・・・・・・、それはほんの冗談のつもりで・・・・・・・・」

俺はそう言っただけで何故か恥ずかしそうにそっぽを向いた。・・・・・・
・なんで赤くなってんだろ俺。

そう言っただけで、印南が驚いたように言葉を発した。

「冗談だったのかっ！？・・・・・・・・いやっ、てっきり本気かと・・・・・・・・」

そう言っただけで印南が思案顔になる。

・・・・・・・・此奴、俺をどんな奴だと思ってんだっ！？
そして少し間が開いた後、印南が思案顔のまま再度問うた。

「・・・・・・・・で、じゃあ結局本命は誰な訳？・・・・・・・・大丈
夫だよ、今騒がしくて誰にも会話は聞こえてねえからさっ」

印南がそう言っただけで、俺に耳を近づける。耳打ちしろと言っている
のだろ。そこら辺には配慮の回る奴だ。俺はそれを見ると溜息を
吐き、そして印南の耳に向かって言葉を吐いた。

「・・・・・・・・そりゃあ、まだ好きに決まってるじゃないか・・・・・・
・・・・・・・・」

そう言いながら俺は顔を赤らめた。・・・・・・かなり恥ずかしい
ものだ、これ。

「・・・・・・・・誰が？」

しかし印南は誰のことだか分からなかったようで、また俺に尋ねてきた。

「……まだ分からないのかよっ!?俺が今まで何人を好きになったと勘違いしてんだっ!?先生も姉さんも少しも恋愛感情を抱いた事はないからなっ!?

俺はそんな印南に呆れたように、再度答えようとして……………そして止まった。

「……………さて、結構これ恥ずかしいぞ?少し遠いけれど、本人が居るところでこんな告白なんて……………!」

俺はそう考えて本名を口にするのを躊躇した。すると印南が不思議そうな顔で俺の顔を覗き込んでくる。そして俺はこんな状況であることを思いついた。

「……………そうだっ!本名を言わずに、しかし尚かつ本人が特定出来る表現にすれば良いんだっ!

俺はそう考え着くと、どう表現しようかと考え始めた。

「……………んーっ、そう言えば、今日の自習の時に離れた女子は、東だけだったよな?

俺はそう思い、そしてそれを使って印南に俺の好きな人のことを伝えることにした。

「……………だから、俺の好きな人は……………」

「好きな人は……………?」

俺は印南に耳打ちをして話し始めた。印南が息を飲む。そして俺は遠回りに告白をした。

「……………今日の自習の時に話した奴だよ……………」

俺はそう言う、印南の耳から俺の口を遠ざけた。．．．．．
よしっ！これで伝わったはずっ．．．．．！

しかし、印南は暫く驚いたような表情で固まっていた。．．．．．
あれっ？どうしたんだろ？前にも言ったことがあったから、そんなに驚くことは無いと思うんだけど．．．．．。

俺はそう思い不思議そうに首を傾けていると、すると印南が顔を赤らめて恥ずかしそうに口を開いた。

「．．．．．俺．．．．．だったのか．．．．．」
「」

なんでそうなるんだよっ！？

俺はそんな印南の言葉に驚いて絶句していた。此奴っ、勘違いにも程があんだろっ！？

「ちっ、違うよっ！？お前のことを言ったんじゃ．．．．．！」

俺は誤解を解こうとあたふたとしながら印南に弁解しようとした。しかし、印南は相当動揺しているらしく、俺の話を聞いていなかった。

俺は壁に頭をぐんつとぶつけて、暫く絶望的に笑いながら明後日の方向を向いていた。

「．．．．．神様、いつそのことそんなに俺が気に入くないのなら、いつペン殺して下さい．．．．．」。

隣には顔を赤らめたまま俯く印南が俺の隣にいて、そして少し遠くにはアタックを決め、胸を揺らす東が俺の目に映り、．．．．．。そしてその間当たりに、バスケットボールで跳ね飛ばされたおっさんの伸びた姿があった。

第十一話 おっさんはバイリンガル

「はあ——っ、やっと放課後だ——っ」

あの後、何とか印南の誤解を解きおっさんを救出し、なんだかんだで今日一日の授業をすべて終えた俺は、首を疲れたようにぐりとまわしながらそう独りごちた。

今日はいろいろなことがありすぎた。出来れば早く家に帰って早く寝たい。

しかしそう言うわけにもいかず。俺は、普段放課後に行くことはあまり無い特別棟の階段を上っていた。

「まったく、今日はひでえ疲れる日だなっ。おっさんもう腰が痛えよっ」

「……………それをお前が言うかつ」

俺は今日の疲労の最大の原因であるおっさんにつっこみを入れながら、特別棟三階を目指して歩いていった。

今の時間は4時ちょうどほど。完全下校は8時なので、タイムリミットまであと4時間。それを過ぎたら、おっさんとの同居生活確定だ。それだけは、なんとしても防がなくては。俺はそう思うと、階段を上る足を少し速めた。早く見つけて、家に帰るぞっ！

特別棟三階英語室。そこには、授業で使っらしい教材や英語の本、

CDなどがずらつと並べておいてあった。何処を見渡しても英語だらけで、一瞬自分が外国に居るような錯覚が起こる。．．．．．しかし考えてみるとそれはまず無い。何故なら、俺は飛行機が嫌いだからだっ！あんな気持ちの悪い鉄の固まりにずっと乗ってられるわけ無いだろうっ！

俺がそんな事を思っていると、おっさんは辺りを見渡して茫然としていた。この学校を見て「イギリスか？」と尋ねた奴だ。もしかしたら本当に外国へ来た気分になっているのかも知れない。そう思つて俺が暫くおっさんを観察していると、おっさんが俺の存在に気が付いて外国語で挨拶を交わしてきた。

「Selamat siang. How are you? I'm very tired. 其我累了、原因？是？瓜。Oh, Je veux rentrer? la maison bien? t」

俺はおっさんの外国に対する考え方が気になった。そしてこの場合、おっさんは実は頭がいいと考えるべきなのか、根っからの馬鹿だと考えるべきなのか悩むところである。

．．．．．多分後者だろう。英語↓外国語↓インドネシア語、英語、中国語、フランス語．．．．．となつた感じだろう。英語を見てこつという思考になるのは重傷の馬鹿であると考えて良いと思う。．．．．．まあ、俺には英語しか分からなかったけどね。．．．．．でもおっさんより頭が悪いとなると心外だ。．．．．．勉強しよう。

次に社会科室、国語室をまわつた。おっさんが本や資料に埋もれて潰れかけたりしたが、入り口は見つからなかった。

そしてその次にパソコン室へ。閉まっていると思つて、どうやっ

て進入しようかと悩んでいたのだが、しかし予想外に開いていた。どうやら情報の先生がパソコンを弄っているらしい。俺は「忘れ物をしましたーっ」と言いながら何とか進入し、そして入り口の搜索を始めた。

パソコンがずらつと数十台並ぶその部屋をきよろしながらいり口を探す。しかしそれらしきものは見当たらなかった。それなので俺は部屋を後にしようとする。……が、……まあーたおっさんがいない。今度は何処だよ？そう思いながら辺りを見渡すと、今度はすぐに見つかった。

……情報の先生の頭の上だ。

情報の先生にはおかしな特徴がある。チャームポイントそれは、かなり薄くなり、殆ど無いに近づいているその髪の毛を後ろでまとめ上げたポニーテールだ。何故このような髪型なのかは、誰にも分からない永遠の謎である。

おっさんはそんな情報の先生の——ポニーテールにぶら下がっていた。どうやらおっさんは地面に落ちそうになり、頑張つてポニーテールにぶら下がっている状態のようだ。

いやいやいやっ、落ちたつておっさんならきつと大丈夫だからっ！それよりもポニーテールが切れたらどうするんだよっ！？

そう思つて俺はおっさん——もといポニーテールを救出しようと駆けだした。

あともうちよつとっ！しかし俺が間に合うすんで、残念ながらおっさんが落ちてしまった。……ポニーテールの数本の髪と共に。

その時、その衝撃でポニーテールに結っていたゴムが弾け、そして髪の毛がわさつと宙に舞つては先生の肩へと着地していった。

「あれっ？何だか頭がチクツとしましたねえーっ。何故でしょうか？そして髪が解けてしまいましたあーっ。何故でしょうねえーっ。不思議ですねえーっ。君、何でだと思います？分かりますかねえー

っ

「わっわっ、分かりませんっ！失礼致しましたーっ！！」

俺は首を傾げる先生を一人パソコン室に放置し、おっさんを握りしめてその部屋を後にした。……せつ、セーフ……。だよな？

急いで逃げてきた為にあがってしまったその息を整えると、俺は静かに図書室へと入っていった。……図書室では静かにしましょう。

知性の香り漂うその部屋には、雑誌を読む人や漫画を読む人、勉強をする人に本を読む人と様々な目的の人が居た。

そこはそれなりに広く、そして本の品揃えも良い事で結構評判のいい図書室だ。

あまり俺は利用したことは無いのだが、結構読みたい本は見つかるし、無かった場合は頼めばすぐに買い寄せてくれるらしい。

そんなわけで、俺は少し物珍しそうに見物しながら入り口搜索を始めた。

まず雑誌コーナーを通り過ぎて漫画コーナーへ。……あっ！この漫画読みたかったんだよねーっ！……後で来て読もつかない？帰宅部だから放課後暇だし。

そんなことを考えながら、次に気を取り直して辞典、文庫コーナーを通り過ぎて心理本コーナーへ。

するとその隅に置いてあった本のタイトルは、——今すぐ簡単！分かりやすい呪術入門編。

……。誰か読む人居るのだろうか？……。居たら怖い。

その他にも殺人関連のラインナップの恐ろしいタイトルの本が置

いてあつたが横目で見ながら通り抜け歴史コーナーへ。．．．．．
何故か幕末の本が異様に多かった。好きな人が居るのかな？．．．．
．．坂本龍馬とか？．．．．．いやっ、絶対に新撰組だろうな。
そんなことを考えながら、しかし歴史は今日生まれたトラウマが
あるのですぐに通り返ける。そして次に古典、英語、数学、理科．
．．．と教科関連のコーナーを軽く見ながら通り過ぎ、そして小
説コーナーへとやってきた。やはりここは他よりも人が多い。
俺は軽く見渡しながら通り抜けようと歩き出した。しかしそんな
時、俺は後ろから誰かに手首を捕まれた。

「．．．．．ん？誰？」

俺は少し驚きながら後ろを振り返った。するとそこに居たのは、
可愛い顔で俺の事をじっと見つめている見知った一人の少女だ
った。

「．．．．．なんだ東かつ。また本を借りに来てたの？」

俺の手首を掴んだのは東だった。俺がそう尋ねると、東の顔が少
し明るくなったように見えた。

「あっ、よかったーっ！やっぱり山口君だーっ！人違いだったら
どうしようかと思ったよーっ」

「山本ね」

そう言つて東は微笑んだ。しかし、どこか悲しそうに見えるのは
気のせいだろうか。

そして東は俺の質問に答えるために口を開いた。

「今日はねーっ、これっ！『2+1』と、『TABAKO』の依存にはご注意を！」を借りるんだーっ！『2+1』はねーっ、何故か今までずっと、出来る友達友達三人グループばかりの主人公の女の子が、しかもいつも主人公以外の二人の方が仲が良いという状況に悩み苦しむ話で、『TABAKO』の依存にはご注意を！」の方は、実はたばこには人を操る事の出来る物質が入ってて、たばこを吸った人々がみんな新しく総理になった歴代最年少の男に操られ、日本が独裁政治状態になる話なんだよーっ！」

東が楽しそうにそう話した。東って結構本好きなんだな。今まであんまり知らなかったけど。

そんな東の説明に応答するために、俺も口を開いた。

「へえーっ、今日のは何だか面白そうだねーっ！俺はたばこの方が気になるかなー。……。ん？でももう一冊あるじゃん？それは……。何なの？」

俺は二冊の本の下から覗く三冊目の存在に気づきそう尋ねた。……。ええっと、簡単、美味しい、彼の胃袋を掴む……。俺が東の持つている本を覗いていると、それに気づいた東は何故か慌ててその本を隠すと焦りながら説明を始めた。

「わあっ！？えっ、えっとこれは、その……。っ！りよっ、料理を、作ってみようかなーっと思ってねっ！あっ、でっでもいっつも私よく料理するんだよっ？でっ、でもたまには本とかも参考にしてみるのもいいかなあーっと思ってっ！そっ、そのっ！私っ、ちゃんといつも料理とかちゃんとしてるんだよーっ！？」

「えっ、あっ、そうなんだっ！……。なっ、何というか……。っ。頑張ってねっ？」

「うっ、うんっ！応援ありがとーっ！山梨くんっ！」

「山本ね」

何故東はこんなに慌てているのだろうか？俺は首を傾げながら、しかし応援の言葉をかけ、つつこみをした。

「……料理をいつもしてるのは偉いし凄いと思うけど……料理本を参考にしようとするってそんなに恥ずかしいものなのだろうか？別に熱心で可愛らしくて良いと思うけど。」

俺はそんなことを思いながら東のことを少しの間見つめていた。すると、何故か東の顔が赤くなっていくのが見えた。……ん？暑いのかな？

しかしその時俺は用事をやっと思いだし、その場を後にしようと東に背を向け歩き出した。

「あっ、そうだっ、俺は用事があるんだっ。んじゃあ東っ、またっ！」

そう言っただけで俺が歩き出そうとすると、しかし東が慌てたように俺の手を取った。

「あっ！まっ、待って山本君っ！」

「……ん？何？」

俺はそんな東の様子を見て立ち止まると、再度東の方へ振り返った。

するとそこにあっただけのは、頬を赤く染めて少し真剣そうな表情を浮かべた東の姿だった。

俺が首を傾げていると、東が口を開いた。

「・・・・・・・・お話があるんだけど、・・・・・・・・いいかな？」

その表情は何だか少し悲しそうに見えた。そして明らかに冗談では無い、真剣な面持ちだった。

俺はその東の表情を見て、思わず了解の返事をした。早く済ませなくてはいけない用はあるのだが、しかしこんな表情を浮かべる少女を一人置いて去るなんて事は、俺には出来なかった。

第十一話 おっさんはバイリンガル（後書き）

「Selamat siang. How are you? I'm very tired. 其我累了原因？是？瓜。Oh, Je veux rentrer? la maison bient?t?」

・Selamat siang. — こんにちは（インドネシア語）

・How are you? I'm very tired. — ご機嫌いかがですか？私は疲れました。（英語）

・其我累了原因？是？瓜。 — 何故なら貴方が馬鹿だからです。（中国語）

・Oh, Je veux rentrer? la maison bient?t? — ああ、早く私は家に帰りたい。（フランス語）

頑張って調べましたが、間違っていたら大変申し訳ありません。

第十二話 おっさんはキューピット

場所を改め現在、外に設置された非常階段の踊り場にて。運動部や下校中の生徒の声が響くその場所は、しかし人氣が無く周りに人の様子はなかった。そんな場所に、俺は真剣そうな表情の東と共に向かい合って立っていた。

「・・・・・・・・・・で、話って・・・・・・・・・・」

俺がそう尋ねると、少しの間東が沈黙を続け、そして東が意を決したように俺の顔を見つめると口を開いた。

「・・・・・・・・・・あのねっ、山本君っ、実は話って言うのは相談なんだっ！」

「・・・・・・・・・・相談？」

俺はそんな東の言葉に疑問符を返した。俺に相談なんて珍しいな。そんな東に俺も真剣に耳を傾けようと東の顔を見つめていた。そして再度、こんな時には失礼かも知れないが、東のその可愛らしい顔に見とれてしまう。しかしそんな疚しい心で相談を受けるべきではないと思い直し、俺は首を振って東に向き直った。

すると、東が少し悲しそうな顔で、俺に尋ねた。

「・・・・・・・・・・突然で悪いけど・・・・・・・・・・っ、・・・・・・・・・・結局山本君って、誰のことが好きなの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。えっ？・・・・・・・・・・・・・・・・ええ——
っ！？」

その突然の質問に、俺は驚いて思わず声をあげた。

そっ、相談じゃなかったのか！？とっ、突然そんな質問されても
っ！！

えっ、誰ってっ！？めっ、目の前にいる君がそうなんですけどっ
！！どっ、どうすればいいのさっ！？

しかし東はそんな俺を見ても動じずに話を続ける。

「だって！山本君は、お姉さんと昔から付き合っで、でも東京
に出てきて離ればなれになっちゃったから寂しくって、お姉さん力
フェがあるって聞いたから秋葉原に行ってみたら間違えて妹力フェ
に入っちゃって、それから年下に目覚めてスカートめくってみたり
とか、ちよっかい出したり虐めたりしてたけど、ある日教室で中島
先生に襲われてから付き合うようになって、それから親友にも手を
出すようになってしまったんでしょ——っ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

俺はその東の真剣そうな問いに首を傾げた。

・・・・・・・・ちよっと待って・・・・・・・・俺はどんな奴だ
と思われてるんでしょうか？どんな危ない人生を送ってるんですか。
・・・・・・・・てか、何をどう勘違いしたらそうなるんだよ——っ
！？

「あっ東っ！？ちよっ、ちよっと待ってそれは勘違・・・・・・・・
・・」

俺は慌てて訂正に入ろうと待ったをかけた。しかし東はそんな俺

の言葉を聞かずに話を続けた。

「おかしいよそんなのっ！好きな人は一人にしてあげないと可哀想だよっ！」

「ええっ！？そこそゆう問題！？」

「それに、まあ確かにBとLのお話いっぱいあるし、私も読んだことあるけどっ！」

「東あんなのも読んだりするのっ！？」

俺は何だか少しずれた気をする東の会話につっこみを入れながらそれでも話を取り敢えず聞いていた。すると、東がそこで一呼吸置いてまた口を開いた。

「・・・・・・・・でっ、でも・・・・・・・・っ！ちゃんとした恋愛しないで、そんなことばかりしてるなんてやっぱりおかしいよっ！・・・・・・・・山本君に恋文抱いてる女の子だっているのに・・・・・・・・っ、そんなの、絶対おかしいよっ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっ？今最後の方なんて・・・・・・・・？」

東が悲しそうな声でそう言った。しかし最後の方は東が音量を落としたせいか少し聞き取りにくかった。

——山本君に恋文を抱いている女の子がいる・・・・・・・・。

そんな言葉を聞き取った気がするのだが、それはまず聞き間違いだろう。俺にそんな感情を抱く女子なんて居る筈ないだろうから。俺がそう尋ねると、東は何故か顔を先ほどよりも真っ赤にして、そしてそっぽを向くと少しいじけたように口を開いた。

「・・・・・・・・なんでもないもんっ」

そう言っで東は口を尖らせた。そんな東に、俺は再度首を傾げた。
・・・・・・・・なんで東はいじけてるんだろっか？そう思っていると、
東はまた俺に向き直っで話を続けた。

「・・・・・・・・とにかくっ！ちゃんと女の人を1人だけ好きにな
った方が良いいんじゃないかなっ！？」

「結局相談じゃなくて忠告なのっ！？」

「・・・・・・・・えっ！？・・・・・・・・あれっ？ほんとだ？」

俺がそう驚くと、東も驚いたようで、不思議そうに首を傾げた。
・・・・・・・・相談じゃなかったのかよ・・・・・・・・。

俺はその忠告を聞き終わると溜息を吐き、そして首を傾げる東に
向かって話しかけた。

「・・・・・・・・あのなー、東っ？それ、全部誤解だからな？」

「・・・・・・・・・・によえ？」

俺がそう言っで、東はとっでも不思議そうな顔を見せた。

「・・・・・・・・ご・・・誤解？」

そう言っで、東は再度首を傾げる。

俺はそんな東に向かって少し不機嫌そうに説明を始めた。

「そー、全部誤解っ！最初っから誤解っ！何がどうなっってそんな噂になったのかわかんないけどっ、全部誤解だからっ！俺はシスコンでもロリコンでもなければ、ホモでもないっ」

そう言っつと、俺は一呼吸置いて、そして少し顔を赤らめながら告白した。

「俺が好きな人は、ちゃんと一人の女の子だっ」

俺がそう言っつと、東は少し驚いたように目を見開いた。顔にはハッとした表情を浮かべている。

その時、暖かな風が吹いた。俺たちの間を穏やかに通り過ぎてゆく。

そしてその後、東がほっとしたように、嬉しそうに微笑んだ。

俺はその表情に、思わず見とれてしまった。

「・・・・・・・・そっかあっ。よかったあーっ」

そう言っつて、東は俺に向かって微笑んだ。何だか心から安心したような、とっても嬉しそうな表情だった。

「てつきり私、山形君は特殊な趣味に走ったんだと思ってーっ。

うんうんっ、やっぱり女の子の方が好きだよなーっ。健全でいいよ！」

「山本ねっ。・・・・・・・・それは健全なのかな？」

そう言っつて俺は首を傾げた。・・・・・・・・まあ、確かに変な趣味があるよりはいいかも知れないけど。健全・・・・・・・・といっつてもいいのだろうか？ふしみだらな行為をしなければ健全？・・・・・・・・

いや、でも人間いつかはみだらな行為をするし、そしたらみんな健全じゃなくなっちゃう……。だあーっ！もうっ、なんで俺はこんな事を考えているのさっ！？

俺は頭を振って考えを一掃した。そんな事を考えるもんじゃあない。しかも意中の人の前で。

そんなことをしていると、しかし東がまた真剣そうな顔付きになっ
て俺に尋ねた。

「……………でっ、結局……………誰のことが好きなの？」

「ひよえっ！？」

なななっ、なんでそれを必要に聞いてくるんだあ！？

俺は途轍もなく焦った。何なんだこの状況！？

俺が焦っていると、東が話を続けていった。

「……………実は私……………。好きな人が居るんだっ。でも、その人は好きな人が居るって言うから……………。だから、気になるじゃん……………」

「えっ！？東って彼氏いないの！？あとなんでそれが俺の好きな人を知ることに関がる！？」

俺が驚いてそう言うと、東が何故か不満そうな顔を見せた。俺、何か間違ったこといった？

とはいえ、俺も安心だ。てっきり東は彼氏居るんだと思ってた。これで堂々と片思いも出来るし……………、俺なんかじゃ無理だろうけど、いつか、もしかしたら両思いも……………。

……………でも、早く伝えないと、彼氏が出来ちゃったりして……………。

ん？・・・・・・・・ちよつと待て俺っ。東好きな人が居るっていったよな？

・・・・・・・・それじゃやっぱ俺は無理じゃん・・・・・・・・。

俺はそんな葛藤を心の中で繰り広げ、そして感情を浮き沈みさせた。

ああ・・・・・・・・。もてるようになりたい・・・・・・・・。そしてあと勇氣も欲しい・・・・・・・・。

俺がそんな事をしていると、東が少し怒ったような表情で、俺を責め立てるように口を開いた。

「分かったよーっ、じゃあ、間接的に聞くよ？・・・・・・・・私の知ってる人ー？」

「知ってる人！？・・・・・・・・。うんっ、まあ大いに知ってる。誰よりもよく」

「ほえっ！？それ誰ーっ！？」

俺は正直に答えた。間違っではない。すると東は心底不思議そうに首を傾げた。

そんなことをやってると、突然俺の胸元から苛ついたような声が聞こえてきた。

「んだあーっ！！もっじゅっじゅっ！！両方とも告白すればいいのによっ！聞いてらんねえよ！早くいっちゃえよっ！！俺の好きな人は――」

「うわあああっ！！止めろ、それ以上言っなよ！！」

俺はそう言って胸元を押さえた。そんな告白あつてたまるか。

声の主はおっさんだった。てっきり俺は寝てるんだと思っていたが、どうやら起きていたらしい。

そしてそのおっさんの声で、目が覚めた。はっ、そうだ。早く入り口を探さなくちゃいけないんだった。

それを思いだした俺は、東に背を向ける。

「そっ、そうだった、俺急ぎの用事があるんだったっ！じゃっ、また後でーっ！」

「ええっー！？あつ。ちよつとーっ！」

そう言っつて、俺は校舎の中へと走っていった。危ない、おっさんがばれる所だった。

しかし、東はそんな俺に向かって叫んできた。

「結局、山本君の好きな人はあ——っ？」

まだそれを聞くのか！？

俺はそんな東に驚きながらも、しかし仕方ないかと言っように、その問いに答えた。

「今は言えない——っ！けどっ、絶対いつか言っからっ、それまで待ってて——っ！」

そう、少し顔を赤らめながら言っつた。
すると、東も返事をする。

「うんっ！分かったあ——っ！！絶対だよ——っ！！約束ね——っ！」

そう言って、東は俺に向かって手を振った。
そして俺は、三階の階段を駆け抜け、二階へと向かうのだった。

第十三話 おっさんはびっくり

「・・・・・・・・お前って、意外ともてるんだな」

二階へ辿り着き、科学室を調べている最中におっさんがそんなことを言った。

「はあ？そんなわけないだろう。何を見てそんなことを言うんだよ」

俺はおっさんの言葉に否定する。もててたら今頃彼女がいるさ。しかしおっさんはそんな俺のことを呆けた顔で見つめながら、また俺に言葉をかける。

「・・・・・・・・本当に何も気づいてないのか？」

「・・・・・・・・はあ？何が？」

「・・・・・・・・・・はあ——っ。先が思いやられるよ」

「なんでだよ？」

おっさんは何故か俺の顔を見て溜息を連発し始めた。何だよ、俺なんかしたっけ？

俺が首を傾げて悩んでいると、おっさんが俺に尋ねてきた。

「お前の好きな東ちゃんには、早く告白しないのか？」

「……………なっ！？なんでおっさんがそれ知ってるんだよ！？」

「そりやさっきの会話で誰だって分かるさつ。……………お前と東以外にはな」

そう言っておっさんはまた俺に呆れ顔を見せた。

「……………ええっ！？なんでさっきのでバレルんだよ！？なにこのおっさん！？」

そしておっさんは俺に解答を促した。

「でっ、どうなんだよ？いつになったら告白すんだ？」

俺はそう尋ねられると、顔をそっぽに向け少し頬を赤く染めた。
そして悩んだ挙げ句答える。

「……………その内、近いうちに絶対するよ……………卒業までには……………」

するとおっさんはあからさまに不服そうに声をあげた。

「はぁーっ！？なんだそのへっぴり腰はっ！早く告白しろよっ！」

「でっ、でも東には……………好きな人がいるし……………」

そう言つと、おっさんがまた大きな溜息を吐いた。全く、おまえって奴は……………。と呆れたように呟いている。

「……………だってそうだろ？好きな人がいるってわざわざ言ってきたのに、そんな奴に告白するなんて……………。なんか申し

訳ないし、可哀想だし、100%振られるし……。

この前は彼氏が居るかもしれないという理由で告白を躊躇していたのだが、今回はそう言う理由で俺は告白を躊躇っていた。……
・・はあ、でも好きな人教えるって言っちゃったしなあ。……。

すると、そんな俺を見ていたおっさんが突然何か思いついたように手で小槌を打ち、そして俺に賭を持ちかけてきた。

「じゃあ、こうしようっ！俺が無事帰れたら、明日お前は東に告白しろっ！」

「はあっ！？何だよそれっ！」

俺はそんなおっさんの提案に驚く。いやっ、むりむりむりっ！明日なんて急すぎる！

そんな焦る俺に向かっておっさんは畳み掛けるように言葉を続けた。

「もし俺が帰れなかったら、……明日印南に告白しろっ！」

「さあ！早く入り口を探そうかあ——っ！！」

そんなことあつてたまるか！俺は必死に入り口の搜索を始めた。そんな中、おっさんは顔に笑みを浮かべながら言葉を付け加えた。

「もし俺が帰れたときには、明日一日、地底人特製専用地上観察カメラでお前の事ずっと見ててやつから、安心しろよ？」

俺はなんとしても早く入り口を見つけようと思った。……。

・あーっ、もう！この際東には当たって砕けるだっ！
そして俺たちは、科学室を後にした。

地学室は先ほど悪夢を思い出しながら頑張っただけだったので、お次は化学室へと向かった。

そこにはあらゆる実験道具が置かれていて、如何にも理科教科の部屋といった雰囲気があった。おっさんがピーカーを割りそうになったが、しかし入り口は見当たらなかった。俺がその部屋を出ようとすると、しかしその時おかしな匂いが漂ってきた。何なんだこの匂いっ！？まさかっ、実験に失敗して毒ガス発生とかっ！？

俺はそう思い、取り敢えず制服の袖で鼻を覆うと準備室へと向かっていった。そしてばんっ扉を開ける。

「大丈夫ですかっ！どうかしたんですかっ！」

そう叫んで俺は足を踏み入れる。と、そこには何かが入れられたピーカーから煙がもくもくと出ていた。その周辺には実験を行ったの形跡あり。しかし周りに人影は無かった。もしかして、これは誰かの犯行！？恨みでもある人物への腹いせか！？そう思っただけで俺はどろろと煙を止めようかと慌てていると、しかし奥から人の気配が近づいてきた。

もしかして、犯人か！？そう思っただけで何処に隠れようかと慌てていると、その時奥から犯人が出てきてしまったっ！

「……………ああ？なんだ？お前は？」

……………犯人……………じゃなかった。化学の先生だ。えっと、佐山先生だっけ？何だか目つきが怖い人。俺はそんな先生の登場に茫然としていると、その先生がピーカーに近づいていった。

あつ！それは毒ガスっ！

しかし俺がそう言葉を発する前に先生はビーカーの前に辿り着き、そしてその香りを嗅ぐと・・・・・・・・卵を割って入れた。・・・・・・・・・・は？

「・・・・・・・・やっぱりチキンヌードルには卵だよな。うん」

先生はそう呟くと割り箸を割ってその謎のビーカー——もとい即席麺を口にした。

ああ、そう言えばラーメンの匂いだわ、これ。ってなんで科学室でラーメン作って普通に食べてんだよっ！俺にもくれっ！しかし先生の目つきが怖いので俺はそろそろと退散した。

そして次は生物室を調べた。ホルマリン漬けが怖い・・・・・・・・。昔胎児のホルマリン漬けも存在したらしい。そんなのあってもいいのか！？まあ、噂だけだ。おっさんかというと、水槽の中の魚に釘付けになっていた。そして一言。

「イカっ！イカは居ないのかっ？」

ここは水族館じゃないんだけどな。そしてどうしてそんなにイカが好きなんだ。

そしてお次は一階下がって保健室等を見ていった。しかしこちらは特に気になる物はなし。唯一気になったのは、田中君がまだ保健室で寝ていたことだろうか。・・・・・・・・大丈夫かな？まあ、寝イビキをかいていたから大丈夫だとは思う。何せ寝不足だったんだもん。そして保健室の先生居なかったことが本当なのに怖気が走っ

た。危ない危ない。

そして校舎内は全て見終わった。現在何も手がかりは無し。

時計は現在5時40分。結構時間がかかってしまった。これからスピードアップしなくては。タイムリミットまであと2時間20分。しかしとなると、全て見て回るのは少々きつくなってきた。何せこの学校広いからな。そんなわけで、俺はやまを張ることにした。えっと、運動場と別館どっちにしようかな・・・。

俺がそんなことをしていると、おっさんが叫んだ。

「俺は絶対別館だと思う！」

おっさんがそう言ったので、俺はそれを信じることにした。

「よし、じゃあおっさんがそう言うんだったらこっちだ！・・・
・・・外の運動場だ！」

「ああ！？それ逆だろうが！」

そう言って俺は昇降口へと歩き出した。

おっさんが来てから俺の運が最悪になったんだ。おっさんの感の外れるに決まってる。

俺はおっさんの不運を信じることにした。

さて、場所は変わって外、テニス場。部活動は遅くて7時までなのだが、どうやら大会は近いようで片付けに入っていた・・・
・・・やってれば女子のスカートが見られたかも・・・とかは考えない考えない。そしたらきつとおっさんがまた別行動を取っ

てしまっただろうから、これは運が良かったと捉えよう。しかし、入り口の気配は全くなし。

続いて次は野球場へ。こちらはまだ練習をしていた。皆個人練習に励んでいる。

「よし、次は甲子園の土を持って帰る練習だ！」

「うーっす！」

……その練習の必要はあるのだろうか？ いや、無いだろう。

そんな光景を横目で一瞥しながら入り口を探していると、おっさんが何だか話しかけてきた。

「なあなあ、俺昔何部だったように見える？」

おっさんが興味心身に俺に話しかける。それなので、俺はきちんと正直に答えた。

「そんな青春時代がおっさんにあっただなんて俺は信じられないし信じたくない！」

おっさんが怒って俺の肌に爪を立てた。いだあっ！それ地味にいたい！

するとおっさんが少しいじけたように声をあげた。

「おっさんにだって青春時代はあったさっ！俺は、こう見えても野球部でな、そりゃーモテてモテて困ったもんだよ！全国の南ちゃんが『南を甲子園に連れて行って』と言ったもんさ！」

「へえー。そんな物好きな南ちゃん何処にいるんだろうね？」

「・・・・・・・・俺の母ちゃんさっ」

「・・・・・・・・うわー、なんかさらつかつこいいこといったよこのおっさん。しかもそれじゃ一人だけじゃん。全国の南ちゃんはたっちゃんかマネジメントにしか興味ないよっ、きつと」

「あと、俺のお袋も婆ちゃんも南ちゃんだ」

「・・・・・・・・南ちゃんいっぱいいて良かったねっ」

そう言つて俺はおっさんを哀愁の目で見つめた。

そして今度は反対に、俺がおっさんに質問をかけた。

「じゃあさ、おっさんっ。俺、何部だったように見える？」

そう尋ねると、おっさんは俺の顔を訝しむようにじっと見つめて、そして答えた。

「なんか青春っぽい部活とか入っていたようには思えないし思いたくないなっ。晩年帰宅部のエース？」

俺はおっさんを睨め付けた。・・・・・・・・俺もそれやったけどっ、すんごいむかつかないっ。

俺はそんなおっさんの答えにいじけ、そして声をあげた。

「違うよっ、そんなわけないだろ？俺もちゃんと部活してましたーっ！これでも野球部のキャプテンですーっ、エースですーっ」

「嘘ですー」

「嘘じゃないですー、本当ですー」

「いや絶対嘘ですー。信じないですー」

「絶対嘘じゃないですー、本当ですー」

「いやいや絶対……」

「何なんだよこれっ！いつまで続けんだよ！！」

俺は伸ばすボー線攻撃にきれた。いや、やり出したのは俺だけどさつ。そして正真正銘俺は野球部のキャプテンだつ！

俺はそう心の中で叫びながら、少し昔のことを懐かしく思いだした。

そう昔でも無いのにとっても懐かしく感じるのは、俺が今東京に出てきているせいもあるのだろうか。中学校時代の俺は、結構野球一筋な少年だった。勉強なんかテスト前にしかしなかったし、当然ながら恋愛の経験は全くなかった。毎日のように部活に明け暮れて、必死に練習したものだつた。その甲斐あってかキャプテンの名を貰い、そして恥ずかしながらエースを務めていた。まあ、田舎の公立中学で県大会にも出場出来ない弱小チームではあったが。

そんなことを考えて懐かしく思っていると、しかしおっさんは全く認めない様子で疑いの目を向け続けていた。

「えーっ、お前がエース？そしたら俺は今頃メジャーリーガーになつてさっ」

おいおい、どんだけ俺は出来ない奴だと思われてるんだ。
俺はその言葉を聞くとむっとして、そして言い放った。

「本当なんだからなーっ！じゃあ、少し見せてやるよっ！」

俺はそう言うと、野球部に少しだけ道具を貸してくれと頼みにいった。

交渉は案外簡単に終わり、俺達は少し場所を移した。現在地は、野球部が練習していた野球場の奥のバッティング場。．．．．．こんな所あったんだ。知らなかった。そこはバッティングマシンが幾つかセツトされており、その後ろには結構高くまでネットが張られていた。おっさんに実力を見て貰うには打って付けだ。まあ、とはいっても最近は全く練習をしてないわけで何処まで出来るかは全く分からないが。しかし、やってみる価値はあると思う。

そんなわけで、俺はバットを構えバッターボックスに入ると、バットを構えた。

「おっさん見てろよーっ、俺の実力をつ！」

俺は隣のバッターボックスからこちらを覗いているおっさんに向かってそう言い微笑むと、開始ボタンをがちっと押した。開始合図の、赤いランプが目の前でついた。

バットを構えて球を待つ。と、その時マシンの手がぐるんと回り始め、そしてこちらに向かって真っ白な球体を投げつけてきた。

まず一投目。俺はタイミングを見て、バットを振る。．．．．．と．．．．．

『バンツッ!』

「なんだ、空振りじゃねえか」

「うつせえーっ!最初は様子見なのーっ!」

一球目は見事に空振り、俺の後ろの金網に勢いよくぶつかった。
・
・
・
・
流石に一球目だけは打てなかった。

そして俺はまたバットを構えた。しかし、さっきの球でタイミングは分かった。この俺が使ってる機械は同じ場所に同じ速さでしか打ってこないノーマルのやつだから、次はきつと打てる。

そう心に言い聞かせ、そしてバットを強く握りしめると俺は次の球を待った。

次は2球目。マシンの手が回り始めた。俺はバットをしっかりと構えて歯をギリリと噛み足を踏ん張ると、タイミングを見計らって思いつ切り振った。すると・
・
・
・
・
。

「カキ————インツッ!」

金属の鋭い音がその場に鳴り響いてボールが空高く弾き返されていった。そして、一番奥の最も高い位置にボールが当たってはすると地へ落ちていった。

俺は思わず呆気にとられて少しの間ぽかんとする。しかし俺は自分がボールを打ったことを自覚すると、おっさんに向かって嬉しそうに笑い、そして指を指して声を荒げた。

「おいっ!すげーだろあれっ!!俺が打ったんだぜ!最近全く練

習しないから打てないかとも思ったけど、ほら、ちゃんと打てただろう？」

そして俺は、もしかしてこれが試合中ならホームランも夢じゃ無かったかも知れないと思い、とても嬉しくなった。エースも伊達じゃないってことさっ。

おっさんはそんな俺の事を見て、あり得ないと言うように途轍もなく吃驚していた。……. っただけ俺が駄目な奴だと思つてんだよ。おい。

俺はその後もすべての球を打ち続け、そして暫くしたときに赤いランプが消えマシンが止まった。

第十四話 おっさんはショック

「お前がエースだなんて．．．．．キャプテンなんて．．．．．
ホームラン打てるなんて．．．．．そんなの嘘だ．．．．．
俺は信じないぞ．．．．．断じて．．．．．」

おっさんがあれからぶつぶつとそんなことを呟いていた。相当衝撃的だったらしい。だからただ俺が出来ない奴だと思っただよ。言つとくけどな、俺はスポーツは野球をやってたからそこそこ出来るし、勉強だつてこの高校で学年20位以内だからなつ。250人中。

しかし、そんな俺の気持ちなんか知らずに、おっさんはぶつぶつとつぶやき続けていた。

「俺なんか．．．．．センターフライかバンドしか打てなかったのに．．．．．」

それで何をどうやったら南ちゃんを惹かれたのだろうか？俺はその点がもの凄く気になった．．．．．それで良く全国の南ちゃんがーと言えたな、おい。

現在野球場を後にして陸上場へやってきた。こちらはまだ部活動中である。様々なところで男女問わず部員達がそれぞれの活動に取り組んでいた。ハードルに高跳びに長距離走に短距離走に砲丸投げに．．．．．端の方には匍匐前進で50m走をやっている奴ら

までいる。．．．．．そんな競技あったらどうか？いや、無いよな。何なのだろう、この学校のそういうちよいちよい可笑しなところ．．．．．すると、そんな匍匐前進をしている人たちの間から声が聞こえてきた。

「こんなんでもへこたれるんじゃないぞっ！でないとサスケに出られないはおろか、女子のスカートの中身も覗けないっ！いいのかつ、お前らそんなでもっ！」

「嫌ですっ！先輩っ！俺はサスケに出られなくても良いけど、女子のスカートを匍匐前進で次々に覗いていくのが夢なんですっ！」

「俺もだっ！俺も人混みのなかで匍匐前進で女子のスカートを覗きたいっ！」

「俺は満員電車だっ！しかも女性専用車両っ！」

「俺は．．．．．」

「俺も．．．．．！」

「よしっ！良く言っただお前らっ！そしたら50mを10秒で進めるようになるまで頑張るぞ！」

「「「おお——！！」」」

俺はこの中からいつか犯罪者がでないか心配になった。

お次はサッカー場。こちらはまだ練習中だ。よく頑張るな、こ

んな遅くまで。俺は腹が減ってきたよ。今日の夕ご飯は……半額で買ってきた肉で作った作り置き（冷凍保存中）のハンバーグかな。ああ、腹が減ってきた。ハンバーグ食べてえー。

そんな事を考えていると、俺の所に声をかける者が現れた。

「おうっ、山本。こんな遅くにどうしたんだ？もしかしてサッカー部の見学……な訳無いなっ、どうせどっかで昼寝でもしてて日が暮れたんだろっ」

「ああ、印南かつ。そう言えばサッカー部だもんなっ、しかもエース。昼寝じゃないけど……、ちよつと用があつてぶらぶらしてたら日が暮れてたって感じかな？」

「用があつてぶらぶら？それ何の用だよ？……まあいいや」

俺に話しかけてきたのはサッカー部のユニホームに身を包んだ印南だった。練習中のところ俺に気づいて話しかけてきたらしい。そんな印南は結構な量の汗をかいており、しかしそれが何故かとてもさわやかに見えた。……なんかやつぱり、イケメンの汗って違っんだな。女子がきゃあきゃあ言うはずだ。俺なんか、汗かいたら只の汗かきだからね。全くさわやかに見えないからね。女子が逃げるくらい只の汗かきってだけだからね。……自分で言っつて悲しくなってきた。

そんな事を心の中で思い勝手に傷ついていると、印南がそんな俺に話しかけてきた。

「お前さ、今日放課後、非常階段の踊り場で東と何か話してただろっ」

「あにやあ！？なになつ、何で知ってんのさあつ！？お前がつ！まあ、あそこ目立たない場所でもないから誰か見てるかも知れないとは思ったけどさつ！なんでよりによってお前が知ってんだよつ！部活中だったろ！？」

俺が思わず焦って声をあげると、印南がそんな俺とは正反対に落ち着いた様子で淡々と俺の質問に答えた。

「いやつ、俺目結構良いからさつ、こつからでもよく見えんだよつ」

「なにそれつ、お前ケニヤ人！？こつから非常階段つて結構な距離あるぞ！？なにその特殊能力！？」

「いやつ、流石にそれは嘘だけどさつ」

「嘘なのかよつ！！」

落ち着いた様子で普通にボケを交わしてくる印南に、冷静さを失っている俺はそれでもきちんとしてこみを入れた。そんな俺が何故か面白かったのか何なのか、印南は顔に笑みを浮かべ、そして俺に本当の経緯を話し始めた。

「いやさつ、実はあの時、俺ちよつと用があつて非常階段の近くを通つてたんだよつ。そしたらさ、男女のしかも聞き覚えのある声が上がって聞こえてきて、それなんて上を見上げたらお前と印南がいてさ、少しの間眺めてたらお前が突然走り出すんだからそれはそれは驚いたさつ」

俺はそれを聞いて少し顔を赤らめた。………なんか、それ

って見るように見れば告は……………。

「……………でっ」

そんなことを思っていると、印南が俺に少し悪戯っぽい笑みを浮かべると俺に質問をしてきた。

「……………お前、とうとう東に告ったのか？」

「ぶはっ!!」

俺はその質問に思わず吹き出した。ななななっ、何を聞いてくるのさーっ!?

そんな印南の質問に、俺はかなり焦りながら答える。

「ななななっ、なんて事を聞いてくんのさあーっ!?!?そそそそっ、そんなわけ無いだろうっ!?!?だって、俺が東に呼び出されたんだぞ!?!?そそそそれはごごご誤解だからなあ!?!?」

そんな俺を見て、印南が一瞬キョトンとしたが、次の瞬間笑い転がりそうな勢いで笑い出して腹を抱えた。

「あははははっ!そうか誤解かつ!あー、そりゃ失礼だったなっ!くっあはははははっ!」

「うっ、わっ、笑うなよっ!」

「い、いや、悪い悪いっ!ついさ、お前のテンパリ方が以上で可笑しくてなあ!あはははははっ!」

「だから、笑うなよっ！」

「いや、ホント悪い！」

印南はそう言うと呼吸を整えるために少し間をおいて、そして俺にまた質問をしてきた。

「じゃあ、何の話をしてたんだよ？東とあんな場所で」

印南にそう尋ねられて、俺は先ほど笑われたことにいじけながら質問に答えた。

「いや、別に何も……。ちよつと相談事を……。ていうか忠告？……。まあいいや、ただちよつと話をしてただけだよ……。互いの好きな人の話とか」

「互いの好きな人の話！？」

すると、何故か印南が心底驚いたように聞き返してきた。それなので、俺は少し訝しく思いながらもきちんと質問に答えた。

「そうだよっ、まず始めに、東が好きな人は誰なのかって聞いてきて……。それで、俺はちゃんと女の子に好きな子がいて、そしてそれをあとで言うって言って来ちゃって……。東も好きな人が居るんだって言うてくるし……。はあ」

俺が落ち込んだようにそう説明すると、何故か印南はとても残念そうな顔をして溜息を吐いた。

「はあ、なんでお前らってそうなるんだろうか……。俺

「・・・・・・・・。」

そう言つと、何故か印南が黙つて俺の顔を呆れたように見つめてきた。・・・・・・・・俺、なんかいけないこと言つた？

俺は首を傾げてそれを見つめ返した。・・・・・・・・ん？何で？そんな顔してんのさ？

すると、そんな俺を見て、印南が心配そうに俺に質問をしてきた。

「で、じゃあ、東にはいつ告白すんだよ？どうせ近いうちに好きな人教えるーとか言つてきたんだろ？」

そう言われて俺は印南から目線をそらした。・・・・・・・・うつ、

凶星。

その質問に、俺は印南から目線をそらしたまま渋々と答える。

「・・・・・・・・うつ・・・・・・・・早ければ・・・・・・・・明日に・・・・・・・・」

俺がそう答えると、すると印南がその言葉に驚いたような表情を見せて、そして感心したように声を上げた。

「それは本当かつ！いや、そう決めたんなら早いほうが良いと思うぞっ！決心したんなら、必ず明日には実行するんだからなっ！絶対な！絶対実行有言実行！」

そう言つて印南は嬉しそうに俺の背中を叩いた。

「まあ、上手くやれよ！俺は応援してっからさ！」

「……………うんっ、お前に告白はしたくないからな……………」

「うんっ？何か言ったか、山本？」

「……………いや……………別に……………」

俺はそう言っつて少し疲れた表情を見せた。……………どうせ振られるって分かってるのに告白なんて気が引けるけど……………、印南に告白なんて事にはなりたくないからなっ。頑張っつて探さなくちゃ……………。ああーっ、でも振られるために告白っつて……………今から泣きそうだっ。

そう思っつて溜息を吐くと、そんな時俺はあることが気になって印南に質問した。

「ん？そう言えばさ、印南っ。お前は何の用があつてあんなところ歩いてたんだよっ」

そう言っつと、印南はああと言っつてその時の事を思いだし始めた。

「うんと……………。ああ思いだした、その時、ちょうど1組の島田さんに呼び出されて……………」

そう話し出した途端に俺は呆れた表情を見せて口を挟んだ。

「まあーた告白かつ、で、今度はどうしたの？受けたの？」

「いいやつ、断ったっ。面倒だからなっ。可哀想だけど、俺部活で忙しくてデートなんか行つてあげられないし、……………昔付き合つた子がいたんだけど、その子が虐められて大変そうだったか

「らなあ」

「……………もてるのも困りもんだなっ」

そう言っつて俺は溜息を吐いた。ああ、今日は一段と溜息を吐いてるよな。あれ、何回溜息ついたら死ぬんだっけ？もうすぐ俺は死ぬんじゃないか？

そう思っている、そんな時俺の胸ポケット辺りからぶつぶつと声が聞こえてきた。

「……………こいつがモテるなんて信じられない……………エースだなんて……………」

「はあ！？お前、本当はそんなこと思ってたのか！？」

「いやいやいやっ！俺じゃない！」

何だかタイミングの悪いときにタイミングの悪い声が聞こえてきた。またおっさんか！そう言えばさっきからそんなこと言ってた……………。それをよりによって印南の前でその言葉は不味いんじゃないか！？

そんな時、印南が少しむっとした声で俺に尋ねてきた。

「だっつてお前の方から声がしたぞ？……………でもお前と少し声が違うか……………じゃあ、誰だよ？」

「いや、俺じゃないけど……………誰だろうねえー！」

そう言っつて俺は誤魔化す。取り敢えず、口笛でも吹いてみる……………いや止めよう、それは逆効果だ……………やばいぞや……………

ばいぞ！印南が怪しんでる！どうしたら良いんだ！？近くには誰もいないし．．．．．！いたいどうすれば．．．．．っ！

．．．．．まさか．．．．．エースだなんて．．．．．。あっ！おっさん！またこの主人公の特権をいとも簡単に使いやがって！まあいいや、これは好都合だっ。あのな、取り敢えずお願いなんだけど．．．．．。

ああ？なんだなんだ？年上にものを頼むときは敬語だろ？

．．．．．っ！．．．．．お願いがあるのですが、暫くの間その独り言を．．．．．。

．．．．．ん？なんだこれ？ああ、今朝のやつだっ。このおかしな会話文はなんなんだ？．．．．．えっと、やばいぞやばいぞ、印南が．．．．．。

わあわあわあっ！なんで印南まで入ってくるんだよ！？ここは主人公の特権．．．．．。

．．．．．で、お願いはなんなんだよ？

．．．．．ん？誰だこいつ？なんかさっき聞いた声に似てる．．．．．誰なんだよ？

．．．．．ああ？俺か？俺はな．．．．．。

．．．．．ああ、今朝の奴か！久しぶり！誰だか分からんが．．．．．おう！久しぶり！お前と会話するのは二度目だなっ。

俺はな．．．．．。

あわわわわっ！だから勝手にそこで会話しない！おっさんは正体ばれたらいけないの！

．．．．．おっさん？こいつ、おっさんなの？どこのおっさんだよ？何処にいんだよ？

．．．．．ああ、俺は．．．．．。

だーから！勝手に会話しない！勝手にこの場所使わない！取り敢えずもつここから出てけ！おっさんは独り言言つなよ！

．．．．．えっ。

．．．．．これどうやって出るんだ？

•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

ああ——つ！もう！結局ぐだぐだじゃなか！
そう思いながら俺は地団駄を踏んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139t/>

ちっさいおっさんみいーつけたぁっ！

2011年11月17日19時29分発行